

匹見町埋蔵文化財報告第21集

# 田中ノ尻遺跡

1997年3月



島根県匹見町教育委員会

匹見町埋蔵文化財報告第21集

# 田中ノ尻遺跡

平成 9 年 3 月

島根県匹見町教育委員会



配石を伴うSK12土坑（南から）



7層下位に出土した集石炉（北から）

## 例　　言

1. 本書は、島根県益田農林振興センターの委託を受けて、匹見町教育委員会が平成7年度に行った道川地区県営圃場整備事業に伴う、田中ノ尻遺跡の発掘調査報告書である。

2. 調査は、島根県教育委員会文化財課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導　島根県教育委員会文化財課

山口大学人文学部教授	中村友博
広島大学文学部助教授	河瀬正利
島根大学汽水域研究センター助手	竹広文明
事務局　匹見町教育委員会教育長	斎藤惟人
匹見町教育委員会次長	渡辺隆
匹見町教育委員会教育主事	河野敏幸
調査員　匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺友千代
調査補助員　栗田美文　中井将胤　大賀幸恵　大谷真弓	
調査参加者　栗田定　森脇雅大　渡辺照　岡本弘	
斎藤直行　渡辺勉　長谷川時子　溝田久子	
山崎リマヨ　大谷孝子　塩道富美枝	

3. 発掘調査に際しては、益田農林振興センターをはじめ、島根県教育委員会文化財課に終始多大な協力をいただくとともに、島根大学教育学部の林正久教授、そして島根大学汽水域研究センターの竹広文明助手からは玉稿を賜り、また山口大学人文学部の中村友博教授からも一方ならぬお世話をいただいたことに対し、ここに合わせて感謝の意を表したい。

また、発掘現場においては、所有者の高橋憲明氏、そして圃場整備事業の推進委員長である河野裕氏にはご理解とご協力を得て、ここに無事発掘調査を終えることができたことに対してお礼を申し上げたい。

4. 今回の調査において、柱穴状遺構-P、土坑-SK、特殊遺構-SXと略号している。なお現場あるいは編集に利用した現地地図は、匹見土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用させていただいたものである。

編集にあたっては、栗田美文・中井将胤・大賀幸恵・大谷真弓氏らを煩わし、執筆は林正久・竹広文明先生、そして渡辺隆・栗田美文・渡辺友千代（章末に記す）が各担当し、編集を渡辺友千代が行った。

## 目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	(渡辺 隆)	1
第1節 今日までの発掘要領		1
第2節 発掘調査の経緯と経過		1
第2章 地形的立地と環境	(栗田 美文)	2
第1節 地形的立地と位置		2
第2節 地域環境		5
第3章 調査の概要	(渡辺友千代)	7
第1節 はじめに		7
1. 調査の経過		7
2. 調査方法		7
第2節 調査区の設定		9
第3節 層序と層位		9
1. A区・B区・C区の層序状況		9
2. 本調査区の層序状況		11
第4節 遺構の検出状況		16
1. 3層下位の検出状況		16
(1) はじめに		16
(2) 遺構の傾向		17
(3) 各遺構のようす		17
2. 7層の検出状況		26
(1) はじめに		26
(2) 層序と層順		26
(3) 遺構の検出状況		26
(4) 遺構と遺物の関係		29
第4章 出土遺物	(渡辺友千代)	33
第1節 出土土器		33
1. はじめに		33
2. 実測土器		33
(1) 土器観察		33
(2) 土器の分類		37

第2節 出 土 石 器	38
1. はじめに	38
2. 3層までの実測石器	40
(1) 石器観察	40
(2) 石器類の出土傾向	43
3. 7層出土石器	(竹広 文明) 45
第5章 北見町田中ノ尻遺跡の遺構とテフラ層	(林 正久) 46
1. 調査地域	46
2. 目的	46
3. 発掘地の断面の概要	46
4. 分析方法	46
5. 分析結果	46
6. 考察	46
第6章 小 結	49
第1節 第3層出土の遺構、遺物について	(渡辺友千代) 49
第2節 第7層出土の遺構、遺物をめぐって	(竹広 文明) 49

## 挿図・図表目次

第1図 調査地点位置図	2
第2図 調査地点と周辺の遺跡	3～4
第3図 遺跡・周辺の地形断面図	5
第4図 調査区配置図	8
第5図 土層図(1)	10
第6図 土層図(2)	12
第7図 第3層遺構指示図	13～14
第8図 SK03土坑図	15
第9図 SK10上坑図	16
第10図 SK12上坑の堆積状況と配石立体図	17
第11図 第3層遺構図	19～20
第12図 第3層出土遺物状況図	21～22
第13図 第7層遺構指示図	23～24
第14図 集石炉(SX01)	25
第15図 SK18土坑図	26
第16図 第7層遺構図	27～28
第17図 第7層出土遺物状況図	31～32
第18図 出上土器実測図(1)	34
第19図 出上土器実測図(2)	35
第20図 出上土器実測図(3)	36
第21図 出上石器実測図(1)	39
第22図 出上石器実測図(2)	42
第23図 出上石器実測図(3)	43
第24図 第7層出土石器実測図	45
第1表 3層下位遺構計測表	18
第2表 本トレンチ(7層)遺構計測表	29
第3表 1～7層出土遺物集計表	40
第4表 7層出土遺物観察表	41

## 図版目次

- 図版01 調査地点鳥瞰
- 図版02 1. 調査地点遠景（北東から）  
2. 南西からみた調査地点  
3. 調査地点近景（南西から）
- 図版03 1. A調査区の北壁（南東から）  
2. B調査区の北壁（南西から）  
3. C調査区の北壁・東壁（南西から）
- 図版04 1. 本調査区の西半壁（北東から）  
2. 下位層に陥入した3層暗褐色粘質土（SK15）  
3. SK12土坑と上位層にのこる横溢流（南半壁）
- 図版05 1. 磨製石斧出土状況（3層灰褐色粘質土）  
2. 石錐出土状況（3層灰褐色粘質土）  
3. 石器剥片出土状況（7層暗褐色砂土）
- 図版06 1. 東からみた土坑上に表出した配石（SK12）  
2. 半截方法による検出状況（SK12）  
3. 南からみた半截状況（SK12）
- 図版07 1. SK09上坑表出状況（南から）  
2. SK04上坑表出状況（北から）  
3. SK10上坑の半截状況（南から）
- 図版08 1. SK04上坑上の配石  
2. SK05・SK06・SK08・SK09・SK10土坑の検出および光廻状況（東から）  
3. 南東からみた3層遺構の完廻状況（各遺構が円周しているように捉えられる）
- 図版09 1. 7層に表出したSX01（集石炉）や土坑などの遺構（東上から）  
2. 北東からみたSX01（集石炉）と遺物の散布状況  
3. 7層に至る堆積の層序状況（西半壁）
- 図版10 1. SX01（集石炉）の焼石状況  
2. SK19上坑の表出状況（南から）  
3. SK19土坑の検出状況（東から）
- 図版11 1. 3層上・下位の出土土器  
2. 3層下位の出土土器  
3. 3層上・下位の出土石器（1）
- 図版12 1. 3層上・下位の出土石器（2）  
2. 7層の出土石器  
3. 埋め戻し作業（南東から）



# 第1章 発掘調査に至る経緯と経過

## 第1節 今日までの発掘要領

匹見町では、昭和62年度から県営圃場整備事業に伴って、埋蔵文化財に懸かる発掘調査を逐次実施してきた。

その遣り方は、年度ごとに計画立案された圃場整備地内において、それに先立ち、まず前年度に周知遺跡を中心に試掘調査を実施することから始めた。その結果は、凡そ年次ごとに発刊する『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書』に著すとともに、一方では整備事業者と埋蔵文化財の保護についての交渉を行い、整備事業上、保存が困難の場合においては本格調査を実施してきたのである。しかし本格調査は、時間的制約があって事業実施年度と重なるため、調査は当該年度の前半に集中する、つまり4月から8月にかけての調査が多い。また発掘調査のものには時間がより要するもの、あるいは特に貴重な遺跡であった場合などにおいては、再度事業者側と交渉して整備事業の変更、または盛土などの工法で対処することによって、今日に至っているのである。

## 第2節 発掘調査の経緯と経過

今回の発掘調査も年度は異なるものの、凡そ上述のような流れにそった経過を辿っている。つまり中ノ尻と称する本調査地点は、出合原地区（道川）における大町・山根・藪町などの各地点と合わせて行った平成6年度の分布調査<sup>(註1)</sup>で遺跡である、ということが判明したのであった。したがって本地区的圃場整備事業は、平成7年度から開始の予定であったため、匹教第83号（平成7年4月11日付）で同遺跡の調査結果を踏まえ、現行通りの保存を事業者側に通知した。そして平成7年4月13日には、事業者から圃場整備の事業上において困難であり、記録保存のための発掘調査の依頼があったのである。

また一方では、調査主体者側である当委員会においては、事前に調査実施も踏まえて諸手続き等について進めるとともに、また早急な対応を迫られていたので、同年の4月17日には発掘調査を開始したのであった。

（渡辺 隆）

(註1) 『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書』『匹見町埋蔵文化財調査報告第15集』 平成7年3月

## 第2章 地形的立地と環境

### 第1節 地形的立地と位置

鳥根県美濃郡匹見町は、県の南西端に位置し、南東側には広島県と境をなす標高1,000m内外の中岡背梁山地が北東—南西方向に連なり、その南西端の一部は山口県とも接境をなしている。一方、北東には弥敵山を境山として島根県の那賀郡、そして対向する南西側は安藏寺山を挟んで鹿足郡、また北西側は益田市及び同郡内の美都町と接しており、その境界線は118.5kmにも及んでいる。

こうした町域を貫流する匹見川は、北東の背梁山地に所在する標高989mの嶺に源を發し、南西方向に走る山地に沿って、町中央部へ流れて紙祖川などの各支流をあつめて北西へ流路をとて、益田市に流下しているのである。また、それらの流域には狹長な河岸段丘が断続的に形成されており、その段丘面の僅かな平地に耕地がみられるにすぎない。そういう典型的な山間地である本町は総面積300.28km<sup>2</sup>あって、その96.2%は林野で占められているのである（第1図）。

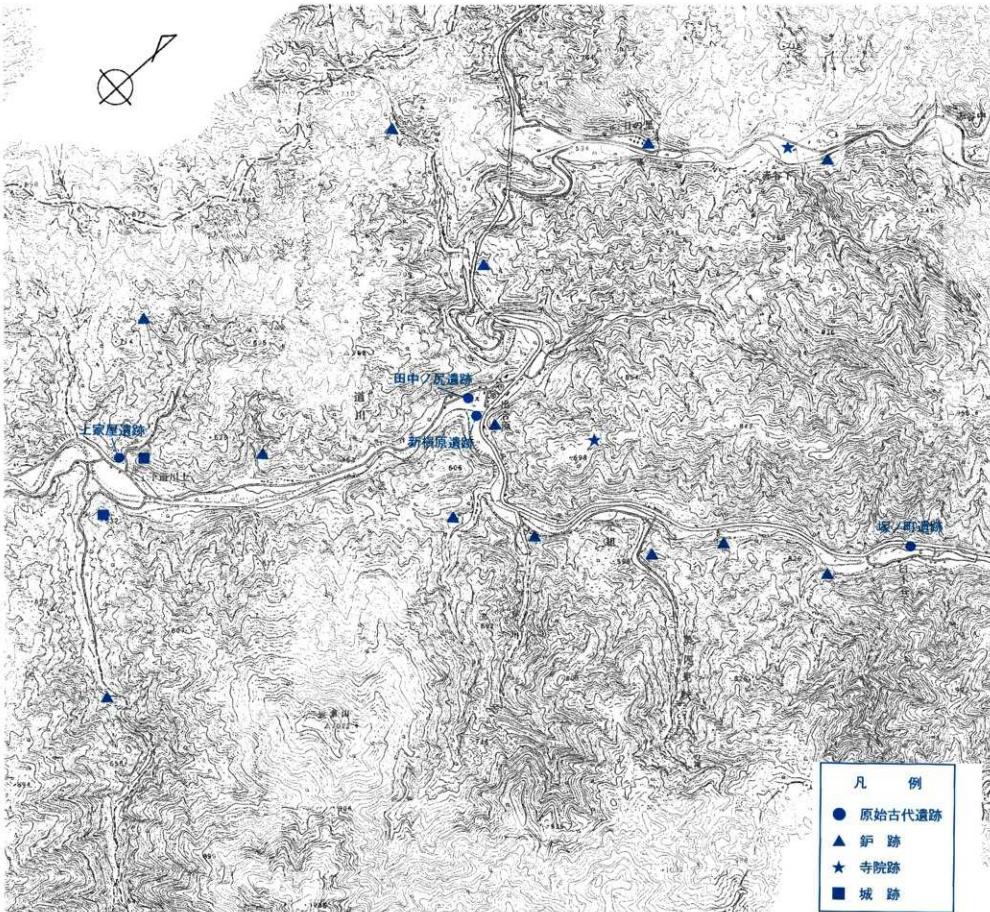
今回、調査対象地とした田中ノ尻遺跡は、匹見町の北東部にあたる道川地区に所在する。その地区は、南東側に高岳（1,054m）・岩倉山



第1図 調査地点位置図

（1,022m）・広見山（1,186m）などの高位な山岳が北東から南西方向に屹立し、その背後の広島県境には県下最高峰である恐羅漢山（1,346m）がひかえ、それに対する北西側にも同様の800m内外の山地が連なっており、北東から南西方向に細長い地形をなしている。また、これらの地形は中世代白亜紀の火山活動によって生成されたといわれ、流紋岩質凝灰岩を主体とする幅8~15km、延長100kmに及ぶ匹見層群と呼ばれる大地溝帯から成り立っているのである。そして、その地溝帯は本地区において白木谷断層と俗称されており、背梁山地に沿って北東—南西方向に走っている。さらにその北西側の高鉢山・寿美白山と呼ぶ山地を越えると、そこは赤谷という地区で、やはり同一方向に伸びる中規模の波佐・赤谷断層が貫層しているのである（第2図）。したがって本地区の河川は、その2つの地溝帯に支配され流下しているのである。それは白木谷地区を流路する本流匹見川であり、そのもう1つは、空山（1,060m）を源流とする赤谷川である。この2川は、上流域では南西方向に並流し、その支流は中流において南東に転じて本流の匹見川と合流し、沖積地をつくりながら下道川をくだり、さらにV字峡谷（表匹見峠）をぬけて町中央部へと流れているのである。

その中流域の出合原地区は、2川の相会地であり、とくに支流赤谷川の左岸は河岸段丘が発達していく、狭小な谷平地が形成されているのである。本遺跡は、その下流域である段丘の南東端にあって、赤谷川と比高差約12mを測った水田（標高469.69m）に位置し、その地点から下流約50mのところで匹見川と合流している（図版02-1）。また調査地点の対岸域は、2川の堆積作用によって狭小な冲



樹が広がっていて、いまだにその豊かな自然がのこされているからと考えられる。

こうした豊富な山林に覆われる本地区の生業は、第1次産業を中心とした、つまり農林業に支えられてきたといえる。とくに藩制期には藤井氏によって、この豊富な山林を製鉄用炭材林として最大限に活用され、鍛業を発展させたのである。その製鉄遺跡は、谷の出合いで多く分布しており、現在その遺跡は37ヶ所が確認されている。それは本町においての50%を占めており、本地区で盛んに行われていたことを裏付けているといえるであろう。また、このように該当地には良材が多かったとみえ、木地師による各種の木地品が生産されていたらしく、“ろくろ小屋田・木地屋原・木地屋敷”という地名から窺われる。この木地師たちは「木地屋登録兼奉加帳」によると、寛文5年～文政13年の間に70余名が入山したことが記述されており、山地の漂白民である木地師たちの好地な生活地であったことを物語っているといえる。一方、地元民たちは山地・山裾を利用し、瘠地を焼畑に利用する一方で、ミツマタ・コウゾを植培し、とくに手漉和紙（石見半紙）の生産を行っていた。彼らは、このような山林地帯を生活の糧とし、その山地の利を最大に活して営んでいたことが窺われる。そして鍛業と併用して行われてきた製炭は、明治・大正・昭和時代とひき繼がれたが、その山の経済活動も振わしくなってゆき、現在戸数78、人口223となり、典型的な過疎地区となっていたのである。

こうした山に向かれた生活誌は生業のみにとどまらず、信仰とも深く結び付いて営まれてきたことが窺われる。それは生きる権を山地においていた人々は、その山地を聖地として崇拜し、心の支えとして生きてきたのである。つまりそういう信仰は数社の大元社にみられ、その源初の信仰は山に鎮まる祖靈であったようである。しかし、その信仰も山地から平地への生業の変移によって、祖靈的要素を失い、地域神として作神・農耕神へと変異していった様子がよみとれるのである。そのような祖靈信仰の大元社は当地区において4祠みられるが、最も多いのは河内社であり、それらからその生業基盤は農耕であったことには違いないのである。一方、鍛の護り神として金屋子神も1社みられ、また航海の安全の守護神の金比羅宮や、あるいは宮島系の4社も在存して地域色があらわれているのである。一方でそうした山陽側に多く分布する信仰がみられる背景には、該当地が山陽側に接していることにより、旧くから彼地との地域交流が盛んに行われてきたことにあるといえる。例えば、栗栖・河野・竹田（武田）などの姓氏は、戦国期に瀬戸内海沿岸から奥山に勢力を及ぼした小豪族たちで、その末裔が越境して土着したものであったと考えられる。それらの諸々がもたらした移植文化といえるものの影響は大きく、それは生活の立て方・風習・方言にまで及び、本地区的地域色を形づくっているといえるであろう。

（柴田 美文）

## 第3章 調査の概要

### 第1節 はじめに

#### 1. 調査の経過

調査は平成7年4月17日から始めて、4月の下旬には表土から進捗して3層に至った。その3層において約60片の轟式、あるいはこれらに伴う土器片数10点、また石器類約200点が出上し、一方では土坑などの遺構も検出された。そこで5月15、16日の両日に山口大学人文学部の中村友博教授を招請して指導を仰ぐ。そして、これらの検出物の実測を5月上旬には終え、本調査区の北西端に凡そ4m × 7mのトレンチ（後に第7層検出トレンチと称する）を部分的に設けて（第5図）、下位層の文化層の有無について調査することを手掛けたのである。

6月15日、該当のトレンチの7層めから赤褐色した石群を検出（第14図・図版10-1）。これは層位的にみて、この人為的遺構は縄文時代早期、あるいはその以前ではないかと想像されたのである。そこで貴重な遺構の検出方法等などについて、6月17日と18日の両日、広島大学文学部の河瀬正利助教授を招請して指導を得る。その後、集石炉と想定されるその遺構を、細心の注意を払いながら掘り進むと、下位には細小な安山岩質の剝片や碎片、また炭化物が少ながら出上する。6月22日、これらの共伴した遺物についての見解を得るために、島根大学汽水域研究センターの竹広文明助手に教示を頼る。そして7月14日には、島根県教育委員会の清原茂治教育長ほか4名が来跡された。その後、同月19、20日には県教委の文化財課の今岡保護主事が調査指導に、22日には島根大学教育学部の林正久教授、前述の竹広文明助手、そして島根古代文化センターの松本岩雄主幹らが相次いで来跡し、今後の調査の進め方や方法についての教示を受ける。

7月中旬からは各指導者から受けた教示にそい、とくに7層と8層の層界面の遺構の検出、そして図面などの記録をし、上旬には本遺跡の調査はほぼ終了した。そして8月に入ってからは、事業者側に対して強く現状保存を求めるとともに、一方では第7層内から検出された集石炉のレプリカ作製について、匹見町に要望する。それらの要望も同月中旬には充たされることになって安堵する。下旬の29日、30日の両日、山口大学の中村教授が来跡。9月11日から14日までの4日間、集石炉のレプリカづくりの型取りに京都科学標本株式会社が来跡し、同月の18日には遺跡の掘削面に砂土を撒入して、盛土で保存処置を行い、全て完了。

#### 2. 調査方法

調査区の設定位置については、平成6年度に実施した分布調査（『匹見町内遺跡詳細分布調査報告書』）において、凡その状況が把握されていたので、本調査区はその分布調査区に隣接して設けることにした。そして層序状況もある程度は理解されていたので、セクションベルトもできるだけ省き、調査区内に十文字に設定したのみであった。しかし遺構の検出にあたっては、必要に応じて2分割、あるいは4分割法を用い、また遺物の取り上げについては原位置記録法を行った。つまり垂直、平面分布をも実測したのであるが、後世の人為層と考えられる1・2層（耕作土・客土）からの遺物（中



第4図 調査区配置図

にはそれ以外のものも含んでいるかも知れない)は、層名のみだけ記して取り上げることにした。そして3層の遺物包含層に至っては、さらに上部に出土したものを「3層上位」とし、下部に出土したものを「3層下位」。そして遺構中に共伴したものは遺構名を記すなど、層位的に把握することに努めた。この取り方は他の包含層においても同様な方法で行った。

## 第2節 調査区の設定

本遺跡の所在地は、島根県美濃郡匹見町大字道川イ33番地ほか(第3図・第4図)で、そこは水田地(図版-02)であって、また地名を「田中ノ尻」と呼称されている場所である。調査区は、その該当地内の分布調査で既掘した試掘坑に並列して設定することにしたのである。

まず基準となる主軸線を、その分布調査の試掘坑に沿うように、つまり磁北方向に15m測って、そこに杭を打つことから始めた。そして南側の東方向は、基準線の南端から10mを測った。しかし北東側は、水田の形から変則的な実測を余儀なくされたのである。したがって、その東側は、南端側の東方向に10m測った東端杭から、北側に4m測り、また北端側は基準軸から東へ3m測った地点としたのである。そして最後の北東側は、それらの実測した両地点を結んだ形で、調査面積111.5m<sup>2</sup>を測る区形を設定したのである(第4図)。

その後、第3層まで進掘した段階で遺物・遺構の共伴がみられたので、南西側に分布調査の試掘坑と結連する区形の2m×5mのものをさらに拡張した。そして一方では、これらの広がりを捉らえるために、北東側の上段の水田に3つの試掘坑を新たに設定したのである。それは2m×7mのものをA区、2m×3mのものをB区、そして2m×3mのものをC区としたトレーンチである。したがって、最終的には調査面積は147.5m<sup>2</sup>となった。なお呼称については、広がりを捉らえるための試掘坑は、上述のとおりA区・B区・C区とそのまま呼び、以下、最初に手がけた大区画のものを本調査区ということにする(第4図)。

## 第3節 層序と層位

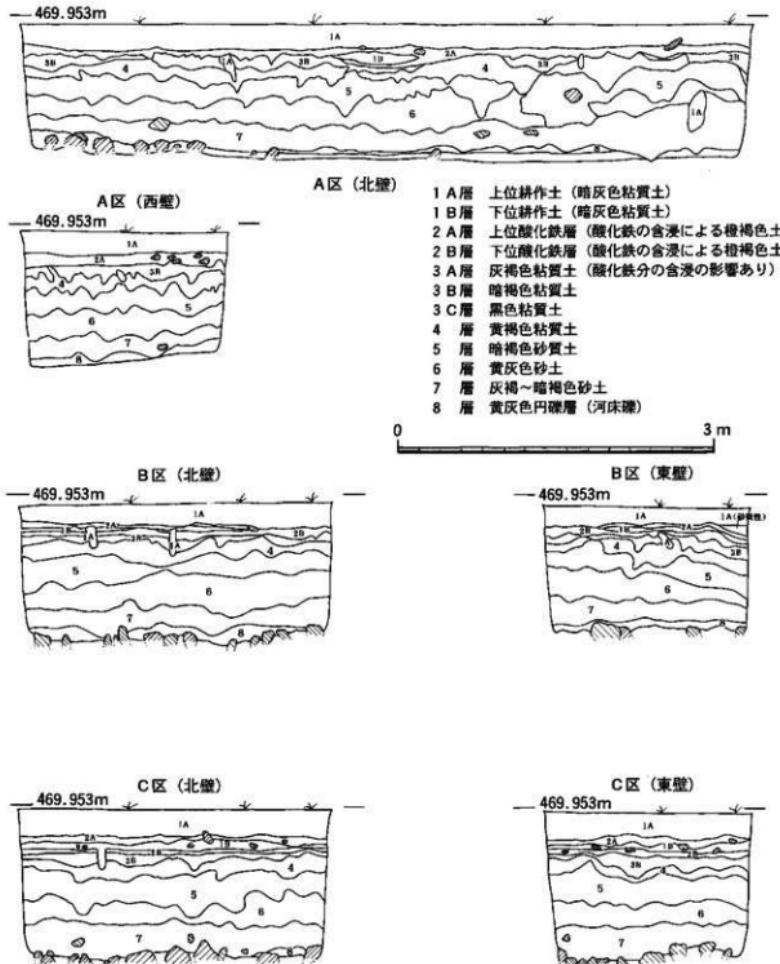
### 1. A区・B区・C区の層序状況(第5図・図版03)

これらの調査区は、本調査区と称名する調査区の3層下位面まで掘削した段階で、その文化層の広がりを確認するために、北東側に設けたものである。なお、その北東側の現地表面標高は凡そ469.940mあって、本調査区の標高表面よりは15cm前後高い位置にある。

それらの基本的な層序は、1層の水田耕作土、2層の酸化鉄層、3層の灰褐色～黒色粘質土、4層の黄褐色粘質土、5層の暗褐色砂質土、6層の黄灰色砂土、7層の灰褐色～暗褐色砂土、8層の円礫層の順で堆積する(第5図・図版-03)。その層序は、層位は別にして3区とも一致しており、また基本的には後述する本調査区でも同様の層序であった。以下、その層序・層位などについて、概要していくことにする。

まず表土の1層は、暗灰色をした粘質性の水田耕作土である。層厚は10～28cmを測って、調査区に

よって厚薄差がみられた。つぎの2層は、酸化鉄分が含浸した橙褐色土で、厚い部分で10cmを測り、また尖滅、あるいは途絶した部分もあって、酸化鉄分の含浸の度合差がみられた。本層を土質的にみると、有機質系のもので、心土層とする客土とは捉えられず、むしろ性質的には下位の3層に類似している。しかし色調から取えて分層したものであった。またこの層位は、2層から成っている部分



第5図 土層図(I)

もあり（上位と下位に分層している），これは耕作土層においてもいえることで，つまり両者の堆積が相互的に2段階で形成されているのである。その成因は，おそらく水田地のマチダオシ（再整備）によって成ったものと捉らえるのである。

3層は，粘質性の灰褐色～黒色した有機質土。層厚は，厚い部分で20cmばかり測るが，尖滅したところもある，厚薄差がみられた。おそらく本層は，橙褐色の2層とは，色調的には異なるものの，土質的には類似しているので，実質的には2層とした層位も含んでいたものと捉らえられる。そのうえ，その上面を水田の整地のために削平したことが層序的にも窺えることから，実測厚よりはより深層であった，ものと考えられるのである。そうした状況によるものであろうか，1層の耕作土，また2層の橙褐色土から数点の土器・石器の細片であるものの，遺物が確認され，とくにC区での7点の黒縞石は注意されたのである。（第3表）。しかし，遺構について確認することができなかった。

4層の黄褐色粘質土は，当地方では「アカツチ」と呼ばれているもので，粒子はきわめて小さく，粘着性が強くて締った感じの層位であった。層厚は，尖滅部分から厚いところで30cmを測って，厚薄差がはげしく，その層界は明瞭ではない。上層位の3層においてもいえることであるが，両層とも目立った礫石はみられず，また本層では遺物・遺構も皆無であった。

5層は，暗褐色した砂質性の層位であった。層厚は尖滅，あるいは途絶した部分もみられたが，厚いところでは50cmばかり測って，バラつきがはげしい層位である。土質は砂質性で，暗色おびるのは有機質（植物系）の腐植土によるものと考えられる。また本層には，河道であったらしい面影を遺す20cm大の河原石が多少みられたが，小礫石状のものではなく，比較的にキメ細かい粒子状のものであった。本層を層序的にみると，おそらく対岸に立地する新柳原遺跡というところの，第5層（暗褐色した砂質<sup>(註1)</sup>）に相当するものであろうと思われる。その該当遺跡の第5層では高山寺・田村式並行期のものか，これよりもやや古式といわれている黄島式のものが検出されているが，本遺跡の相当すると想定される層位からはまったく遺物はなく，もちろん遺構も検出されていない。

6層は，黄灰色した砂土である。砂土といってもバサバサしたようなものではなく，やや粘質性をおびたものである。層厚は，一部尖滅したところもみられたが，厚い部分で40cm以上を測り，下面の層界は比較的平坦に堆積し，礫石などはほとんどみられなかつた。本層は新柳原遺跡でいう第6層に相当するものと想定される。A区・B区・C区のいずれの調査区とも，遺物・遺構とも検出されなかつた。

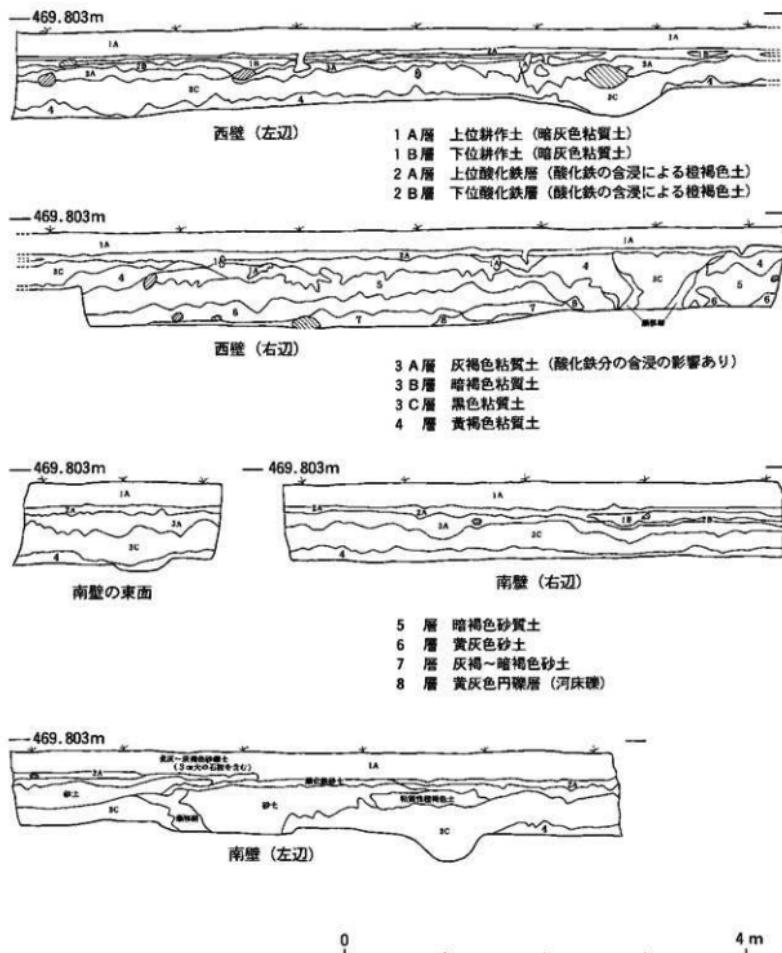
7層は，灰褐色～暗褐色をした砂土である。本層の層厚は20～30cmを測り，部分的に下面を中心に円礫を含み，やや砂性で，おそらく暗色系の色調は有機質（植物系）の腐植土によるものであろうと考えられる。また調査区によって多少の差異がみられた。つまりA区では暗褐色で砂性が強いのに対して，B区・C区では灰褐色を呈し，やや粘質的であった，という違いである。しかし，3調査区とも上位層に比べて比較的に平坦に堆積していることは一致しており，また層順的にみても合致していることから，調査地区によって多少の違いがあるものの，これらは同一層序上のものと捉らえられる。

## 2. 本調査区の層序状況（第6図・図版04-1・図版09-3）

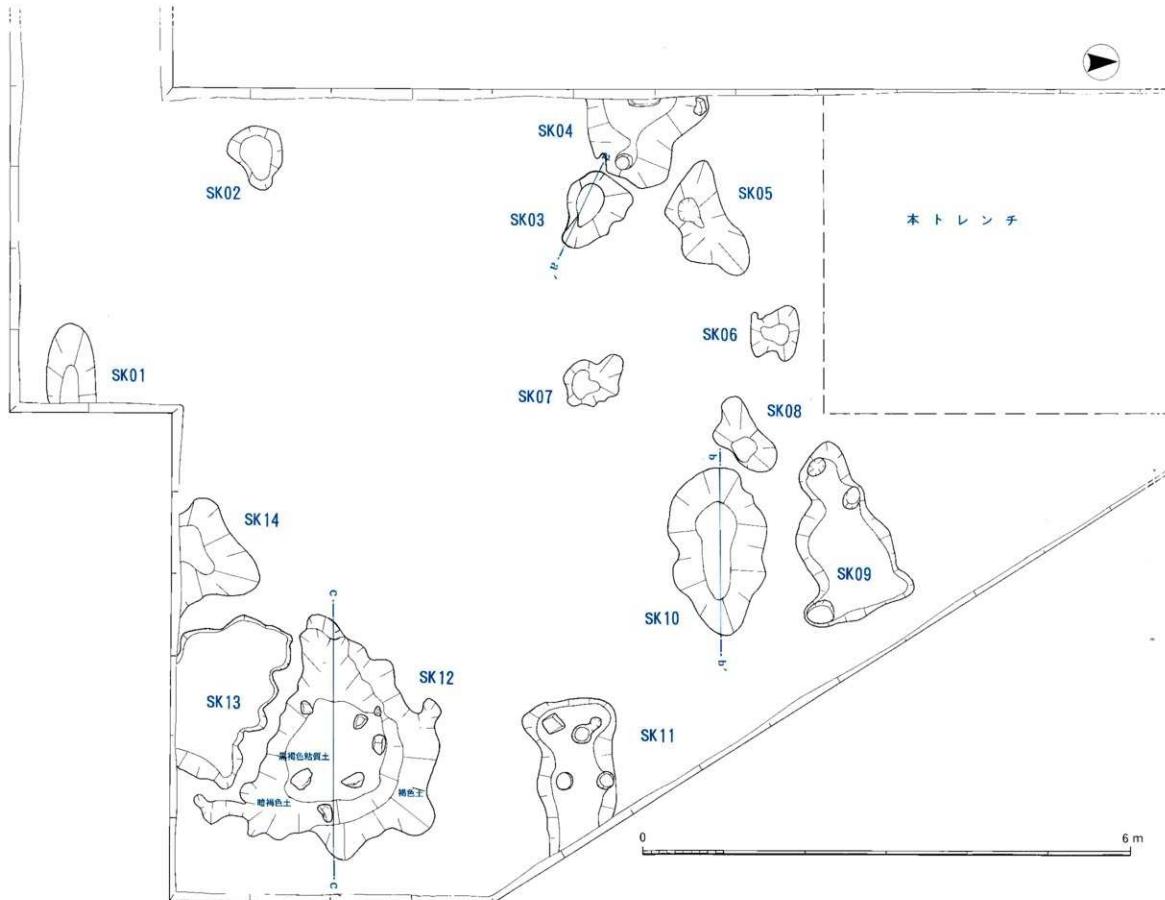
本調査区における層序状況は，前項の3調査区で記述したとおり，基本的にはそれらと大差はないので，ここでは主に出土遺物，あるいは遺構との関連性について捉らえておくことにする。

本調査区における基本的層序は、1層の水田耕作土、2層の橙褐色土、3層の灰褐～黒色粘質土、4層の黄褐色粘質土、5層の暗褐色砂質土、6層の黄灰色砂土、7層の灰褐～暗褐色砂土、8層の黄灰色円礫層（河床疊）の順で堆積する。このことは前項の各調査区の層序と、ほとんど違いはない。

そのうち1層の耕作土、2層の橙褐色土（酸化鉄分の含浸による）は、とくに該調査区の標高の低



第6図 土層図(2)



第7図 第3層遺構指示図

い南半側において、部分的に2重構造に堆積していた。これは、広がりを把握するための試掘坑のA・B・C調査区でも同様な堆積構造であったが、同様に指摘しているように、それは水田の再整備によることに主因したものと考えられる。したがって、両層からは中津式併行期の土器片、あるいは石器類が10数点出土しているのは、そうした状況によって、混入した結果によるものと想像される。

つぎの3層は、灰褐色～黒色粘質土である。この層位を調査時の段階では一様、「1黒」と別称して呼んでいたものである。層厚は、とくに南側においては40cmを測って深く、逆に北側に向っては徐々に上昇して薄層となり、そして本調査区内のはば中間どころで本層は、凡そ尖滅していた。しかし、北半部において本層が全て消去したかというと、そうではなく残存した部分も所どころみられたのである。このことは後後に水田造成のために、とくに標高が僅か高かったと想定される北側面において、強い削平が行われたことが考えられる。したがって、本来は北側辺でも地形に沿って、ある程度の堆積高があったものと想像されるのである。なお本層の土質は、きめ細い粒子状の有機土で礫石などはほとんどみられなかった。また、本層の上位面は酸化鉄分や耕作土の含浸の影響か、やや褐色をおびているが、土質的には3層として包括できるものであった。この上位面からは、中津式併行期のものと想定される土器片数点と、石器類が出土している。一方、中・下位面からは轟式土器系のものが約70点と、そして数点の曾畠式が確認され、石器類を合せ110点余りが出土している(第3表)。また遺構においては、下位面の4層との層界に14基の不整形土坑が検出されている(第11図・第1表・図版08-3)。

これらの遺構は、共伴した遺物、また検出面が下位ということからみて、轟式土器に伴う時期のものと想定される。したがって、本層には2つの文化が介在していたということになるが、上位面が削平されたと想定されること、また同一層内ということもある、とくに中津式系に伴う遺構は確認することはできなかった。また遺物でも土器は別にして、石器類においては出土の傾向(上位か下位に出土したものか)として捉らえる仕別方法しかなく、明確に2つの文化遺物には分類することはできなかった。

つぎの4層についてであるが、当初、本層以下は文化層は存在しないものと想像し、調査を終える予定であった。しかし本調査区の北端面に、4m×7mのトレンチ(本トレンチと称するもの、第7図)を設定し、下位層の状況を把握するために掘削することにした。以下、下位層の状況については該当のトレンチを中心に記述することにする。

その4層は、黄褐色した粘質土で、層状はよく縮っていて、粒子は緻密で礫石などはほとんどみられなかった。層厚は、部分的に尖滅状もみられ、厚いところでは40cm余りを測って、平均的な堆積の仕方ではなく、また北側(上流側)に向かって徐々に上昇していた。なお本層では遺物・遺構は確認することはできなかったが、ただ南半部においては3層からの陥入土坑と想定されるものは捉えられている。

5層は、砂質性の暗褐色土で、仮称「2黒」といっていたものである。色調の暗褐色は植物



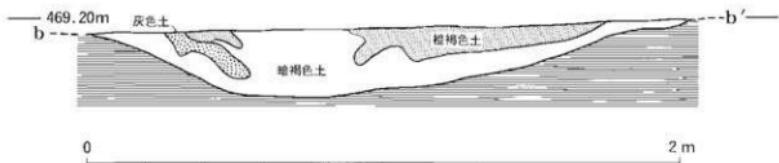
第8図 SK03 土 坑 図

系の腐植によるものと思われる。層厚は、10~30cmを測って厚薄差がある。層状は、やや粘性および砂質性であるが、礫石などはほとんどみられなかった。なお本層は、新槻原遺跡の第5層（暗褐色砂質土）に相当するもので、当層からは黄島式と想定されている早期の土器片が数点出土しているが、本層からは遺物・遺構とも検出しておらず、文化層とはいえない。

6層は、黄灰色砂土である。層位は局部的に尖滅として捉えられるものがみられたが、これは不鮮明な漸移層によるものと思われ、その層厚は、凡そ20~30cmを測って堆積する。層状は、下位の8層よりはやや粘性および砂質性であるが、また上位の4層より土壤の粒子は粗かった。また礫石などはみられず、遺物・遺構も検出されていない。

7層は、灰褐~暗褐色した砂土で、仮に我わがが「3黒」と称していた層位である。層厚は尖滅した部分もみられたが、凡そ15cm程度を測って、自然堆積層としては薄層であった。おそらく褐色を呈した色調は、僅かな植物系の腐植土の影響によるものと思われる。土壤の粒子は、上位の5層や6層に比べれば、やや粗く、粘性も少ない。なお本層からは、10数点の安山岩質による碎片・剝片が出土し、他に人工的礫石や炭化物も確認された（第25図・図版12-2）。また遺構としては、下位の8層に陥入して土坑やピット状のもの、そして集石場も検出されている（第13、14図・図版09-1, 2）。

8層は黄灰色した円礫層で、河床礫と想定される層位である。層厚については、下位を掘削していないので、明らかではない。上位面を確認するかぎり、20~30cm大の河原石を含み、円礫が充足しており、文化層とは捉え難い層位と想定される。



第9図 SK10 土 坑 図

#### 第4節 遺構の検出概況

##### 1. 3層下位の検出状況（第7図・図版08-3）

###### (1)はじめに

3層の灰褐~黑色粘質土は、遺物・遺構の包含層であった。このうち遺物においては、上位を中心にして少量の中津式系のものが、中・下位には轟式が中心に出土している。また遺構においては、上位の中津式系に伴うものは、削平あるいは同一層内ということもあってか、遺構として捉えられるものは確認できなかった。ただし下位面、つまり4層との層界には轟式の時期に伴うと想定できる（共伴性から）遺構が検出された。以下、同位層の遺構を中心に、その検出状況について記述することにする。

## (2) 遺構の傾向

SKと略号する土坑状のものは、14坑が検出された。これらのうちSK03・SK10・SK12の3坑からは焼土痕がみられ、SK04・SK11・SK12には3層中ほとんど礫石などがみられなかつた中にあって、配石状のものが頗在していた。また、これらの坑形は不整形のものであるが、SK09は短径0.61m・長径2.21m、SK10は短径約1m・長径約2m、またSK12は短径約2m・長径約3mを測る長楕円形ものであった。おそらくSK01・SK11も長楕円形のものと想定されることが可能、SK05も同形として捉えられるものであろう。ただし他の土坑については明確ではなく、また小形の不整形のものであった。しかし、これは4層との層界に残柵的に表出された坑底の痕跡であった可能性が強く、3層中位から構築されたと想定されることからみる（坑上の配石、あるいは遺物の垂直分布状況）と、層界面に現出された坑形のみをもって捉えることはできないであろう。つまり、それらも原土坑形では長楕円形であったかも知れないからである。

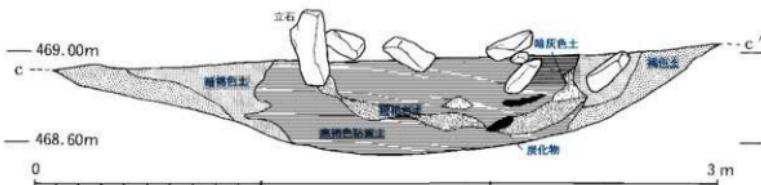
さて、これらの顯著な長楕円形の土坑の方向性に注意すると、長径が東一西方向であることが判る。それは偶然性かも知れないが、ただ原土坑形を保っていると想定できる大型形の土坑に限って、太陽の出没として捉えられる東一西の方向性がみられる事から、強ち否定はできないと考えられる。また、その各土坑を順列に追ってみると、恣意的ではあるが、徑約10mを測って円周しているようにもみられるのである（図版08-3）。

## (3) 各遺構のようす

SK03（第8図・図版08-2）は、調査区の西面に検出された涙滴形状の土坑である。長径方向は北西一南東であって99cmを測り、また短径は60cm、深さは12cmのものである。坑内には大半が暗褐色土が陥入していたが、坑上の中央部には焼上と思われる粘質性の橙褐色土が嵌入していた。しかし炭化物は検出されていない。なお、本坑の坑壁の傾斜は緩やかで、また土坑が小ぶりなどからみて、もとは3層中から構築されていた深坑のものと考えられる。

SK10（第9図・図版07-3）は、最大長径を東一西方向に2.06m、短径を南一北にとって1.01m、また深さ21cmを測る長楕円を呈した土坑である。坑壁傾斜は緩やかで、その坑内には3層の暗褐色土が陥入していた。また坑上の中央部には、部分的に7~13cmを測る焼上らしい橙褐色土が検出され、また灰色土も確認されている。

SK12（第10図・図版06-1~3）は、南東面に検出された本調査区で最も大きな土坑である（第7図・図版08-3）。その長径は東一西方向にあって3.03m、短径は南一北方向で1.96mを測って、



第10図 SK12土坑の堆積状況と配石立体図

深さ0.43mであった。大半は3層の黒褐色土が中央部を中心に陥入しているが、坑端部に向って暗褐色から褐色土へとなっていて漸移する。また、その中央部の黒褐色が陥入する範囲には、30cm前後の河原石が坑上を中心に7個が確認された（図版06-1）。しかもその河原石は、黒褐色土の端面を意識したかのように、周囲させて配されていたのである（うち1石はやや低位置）。また、これらのうちの1石は、幅17cm・長さ34cmを測る縦長の河原石が直立していて、他の石も形状（縦長形）あるいは

第1表 3層下位遺構計測表

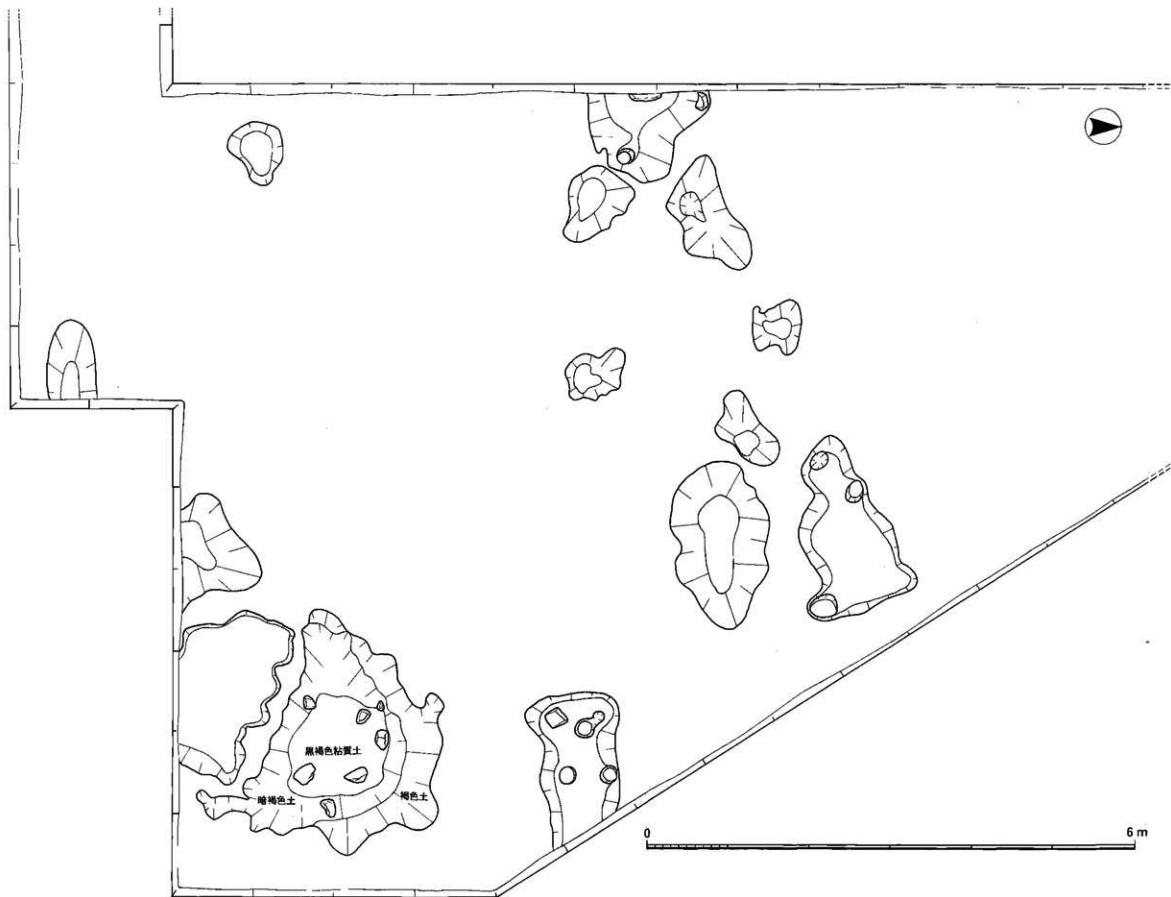
遺構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	検出面標高 m	摘要
SK01	60.0	—	6.5	468.868	長椭円形土坑 (?)
SK02	55.0	77.0	7.5	468.818	
SK03	60.0	99.0	12.0	468.993	焼上痕・涙滴形土坑
SK04	137.0	—	31.8	469.018	坑中に1石・坑上に1石の配石 (?)・坑底に1基のピット
SK05	60.0	144.0	—	469.088	長椭円形土坑
SK06	43.0	77.0	12.0	469.153	
SK07	45.0	86.0	—	468.998	
SK08	42.0	102.0	—	469.168	
SK09	61.0	221.0	—	469.273	坑底に3基のピット・長椭円形土坑
SK10	101.0	206.0	21.0	469.158	焼土痕・長椭円形土坑
SK11	85.0	—	—	469.038	坑中に1石の配石・坑底に3基のピット
SK12	196.0	303.0	43.0	468.983	土器(4点)・黒耀石(黒)・石鐵(1点)・焼上痕・炭化物 坑上に7石の配石(うち1石は立石)
SK13	122.0	—	7.5	468.938	
SK14	104.0	—	9.0	468.903	

現地表面標高 469.803m

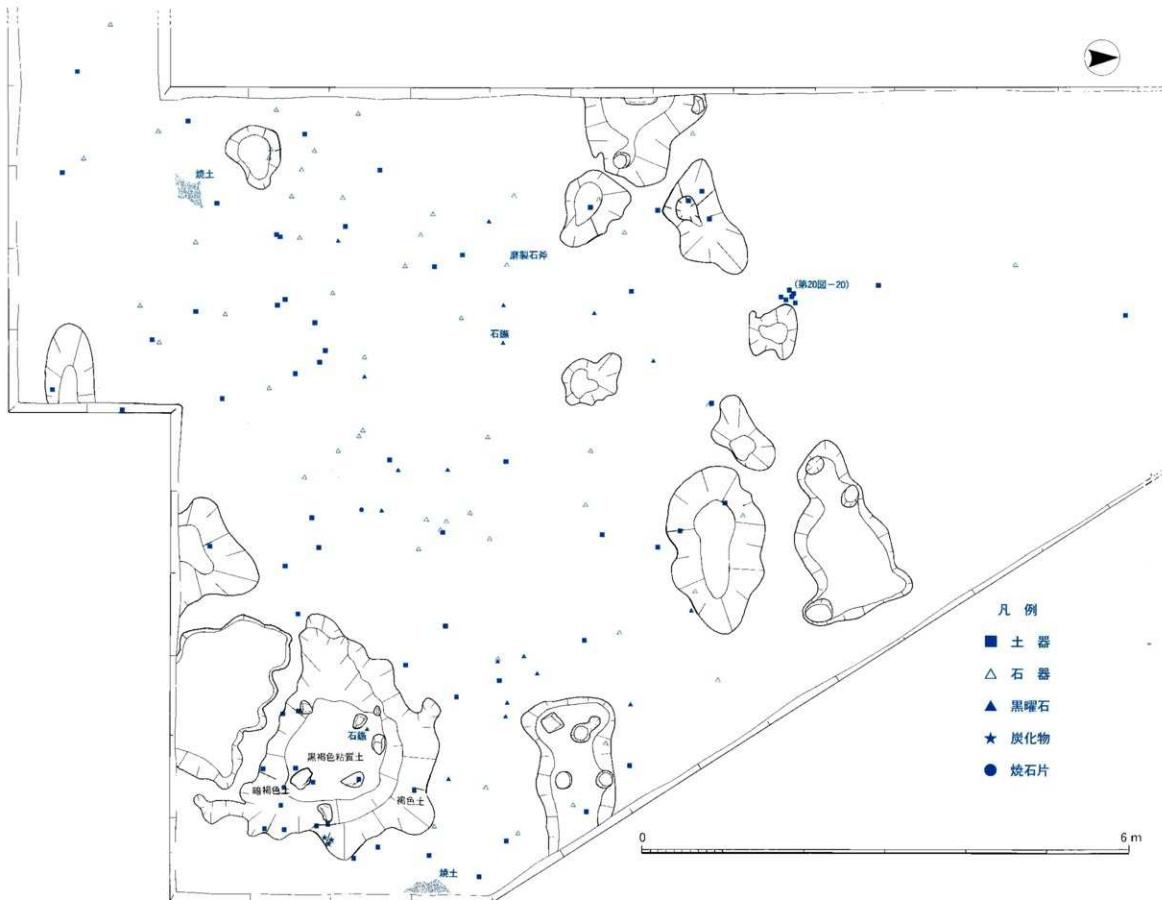
(ーは不明を示す)

配石状態からみて、もとは立石していたのではないかと想像された。また本坑の坑壁は緩斜であるが、実掘した当時においては比較的急斜であったかも知れない。というのも、恐らく外囲する褐色土は漸移層の可能性があるとみられたからであった。そしてその褐色土は、坑上面においては北半のみに張拡していた。また坑内の黒褐色土が陥入する土中には、焼土の橙褐色土が部分的に嵌入していて、頭著な炭化物も検出された。なお、本坑には供伴遺物として、細片の粗製土器4点と黒耀石(黒色)の石鐵1点が出土している。

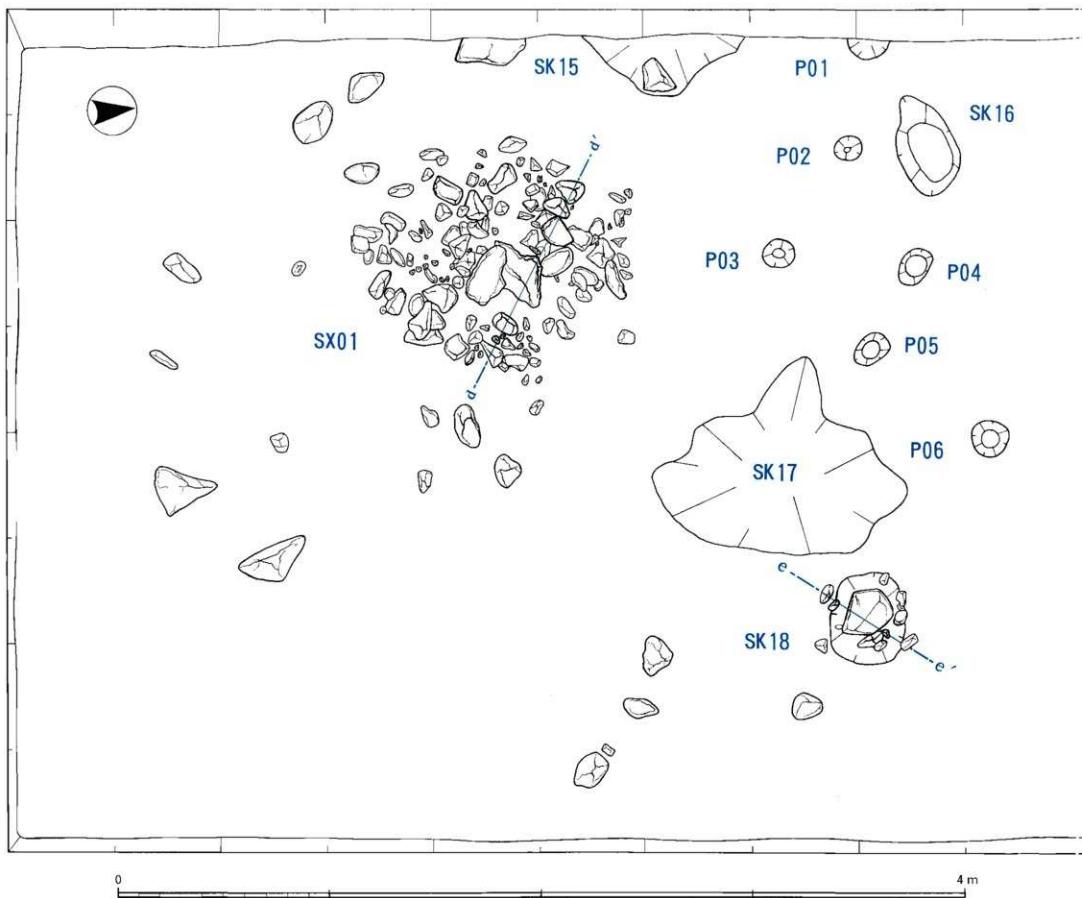
その他の土坑遺構で気付いた点をみていくと、まずSK04・SK09・SK11の坑内にピットが検出されていることが掲げられる(第7図・図版08-1~3)。それらのピットは、SK04で1穴・SK09で3穴・SK11で2穴が確認され、土坑内以外では一切検出できなかった中で、特異に捉えられたのである。これらのピットは、検出面が深層であるということ、また検出状況から小動物類の巣穴とは認識できないことから、遺構としての柱穴状のものと判断された。そしてこれらの柱穴状のものは、いずれも坑壁側に検出しており、SK04・SK09では、検出穴が土坑の中央部に向って斜度をもっていたことが注意されたのである(図版08-2)。一方、3層土中にはほとんど疊石類が確認することができ



第11図 第3層遺構図

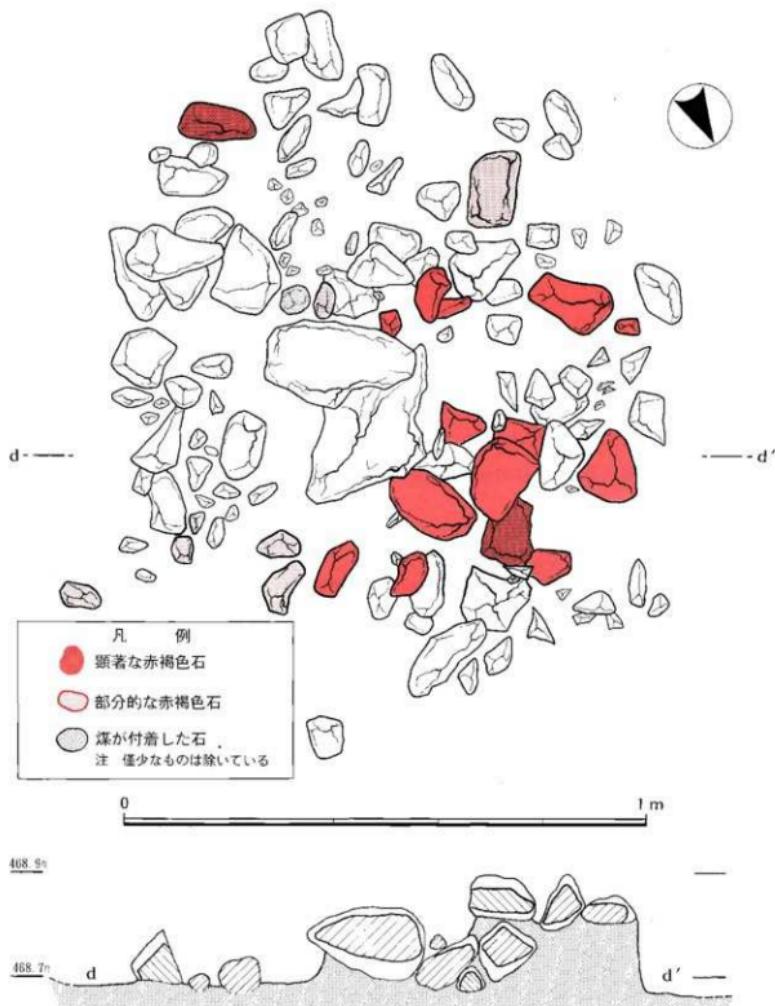


第12図 第3層出土遺物状況図



第13図 第7層遺構指示図

なかつた中にあって、すでに記述したSK12以外にも極めて少數ではあるが、意識的と捉えられる配石らしき石が伴出した。調査区の壁面（東壁）であったために精査できなかったが、おそらくSK04の坑上の約40cmを測る石体（図版08-1）も、位置的にみて同坑に同伴するものと捉えられ



第14図 集 石 爐 (SX01)

る。それは各上坑自体が3層中位どころから構築されていたことが想定されること、また共伴性の遺物が同位から下位にかけて多出していることなどからいえるのである。

## 2. 7層の検出概況（第13図・図版09-1～3）

### (1) はじめに

本項は、本調査区の北側に設けた設けた本トレンチ（4m×7m）における調査の概況である。そのうち特に遺物・遺構が伴出した7層を中心に記述することにする。

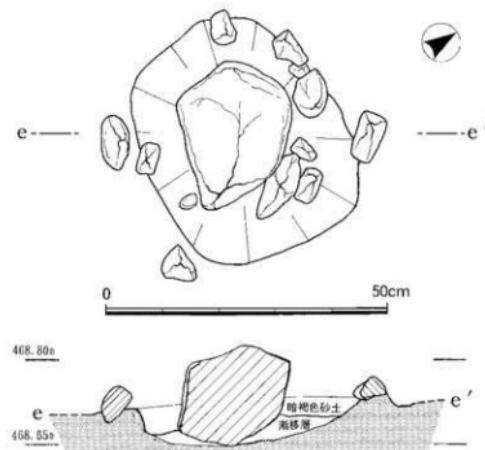
### (2) 層序と層準

遺物・遺構を伴出した7層は、本章の第3節で既述したとおり、灰褐色～暗褐色した砂土層である。本層は、調査の段階では上位から下位に数えて3番めの黒色系だったので、これを「3黒」と仮称していたものである。また本層は、遺跡の折りがりをチェックのために試掘したA～C区の各調査区でも確認されており、対岸（赤谷川を挟んで）の150m北東側の新楓原遺跡（第2図・第3図）でも、ほぼ同様な層序状況であって、該層に比定される層位も検出（第7層 暗褐色砂層）されていることから、この一帯の基本的層序の層位であるということになろう。

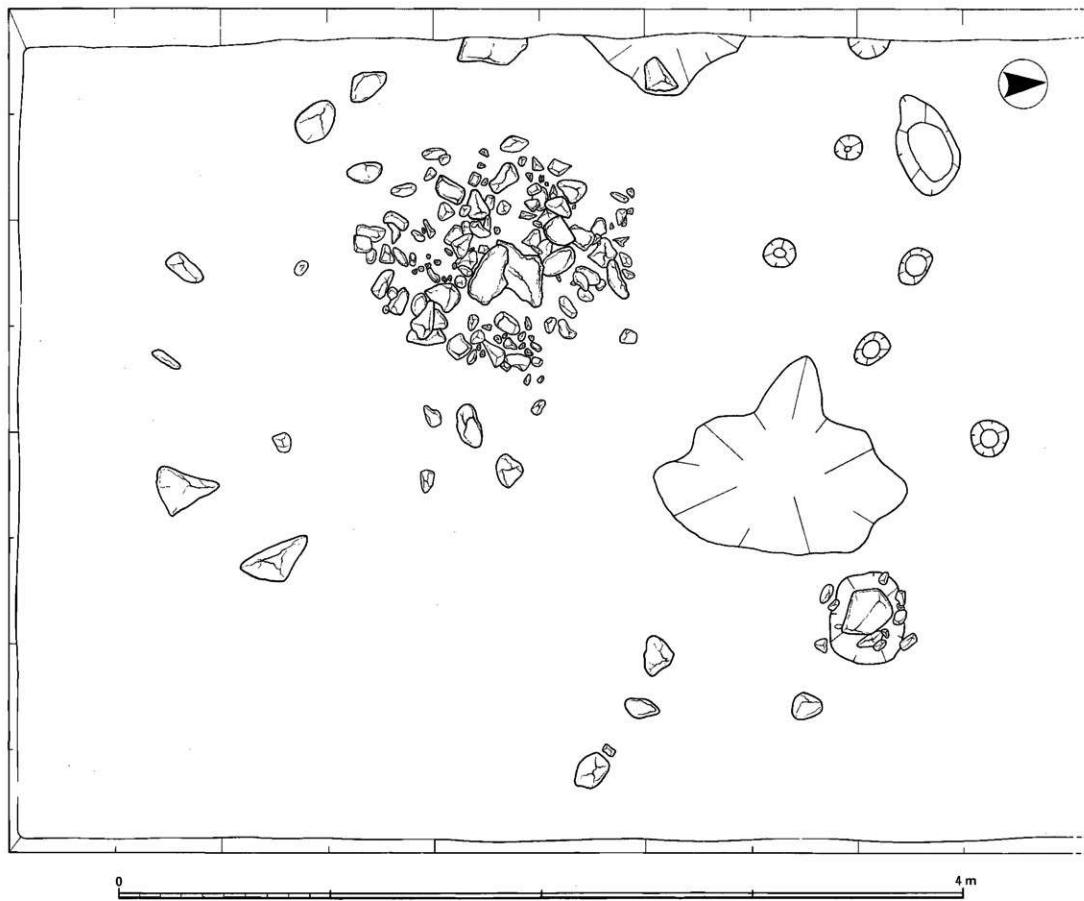
### (3) 遺構の検出状況

その7層からは、SXと略号する集石炉（礫群）1基、土坑（SK）4基、ピット（P）6基が検出された（第13図・第2表・図版09-1）。このうち集石炉として捉えたSX01（第14図・図版09-2）は、短径約1m、長径約1.5mを測る橢円形状の範囲に集石した遺構である。その集石には河原石が用いられ、大きいもので長径約30cm以上、小さいもので5cm前後で、多半は10～20cm大のものであった。とくに石が密集する部分には20cm大の石が折り重なるようにあって、それを取り巻く土壌の色調

は炭化物の含浸であろうか、暗褐色を呈していた。これらの積み重なった石を取り除いて精査していないので、詳細については判らなかったが、色調から判断すると、下位には土坑を有するのではないかと想像された。それは東～西方向が約65cm、南北方向約75cmを測った橢円形状の範囲で、そのうち石の折り重なって高さをなした部分は、北側に偏在していたのである。そして土坑を有したと想定される部分の坑高を除いて、天端との原行の比高差は約23cmを測り、石の重なりがなくしていく南側へは差も少く、その石も疎開的であった。そして、その範囲が本来の集



第15図 SK18 土坑図



第16図 第7層遺構図

石遺構域ではなかったかと思われたのである。その想定される範囲域には赤褐色した焼石、あるいはその碎片石が特に顕著であった（グラビア参照）。また他にヒビや煤が付着したものもみられ（第14図）、やはり、それらの痕跡を強く残しているものは、北側に高まりをもって偏在して存在していたのである（第14図・図版10-1）。それは恐らく流下などによって、南側へ偏喰された結果によったものと捉えられるのである。

#### SKと略号した土坑は、4

第2表 本トレンチ（7層）遺構計測表

基が検出された（第13図・第2表・図版09-1）。これらの土坑は、8層との層界に検出され、いずれも坑内には7層の暗褐色した砂土が陥入していた。そのうちSK18（第15図・図版10-2～3）では、その坑上に配石らしき数個の河原石が検出している。土坑の大きさは短径36cm、長径44cmの橢円形を呈したもので、深さは約9cmを測る。そして、その坑に配された右体は、横

約20cm、縦約25cm、厚さ約20cmを測るもので、ほぼ中央部に位置した所に検出され、その開口、とくに北東側には10cm未満の礫石が数個みられたのである。これらの礫石は、検出状況からみて、意識的に配されたと思われ、また坑底部には數片の人がらしき碎割した礫石もみられた（図版10-3）。しかし、意識的につくられたと想定できるこの土坑も、その目的あるいは性格については判らなかった。また顕著な石としては、SK15（図版09-3）とした土坑でも、角礫の1石が確認されているが、これは意識的かどうか、についても判断できなかった。

ピット（P）として捉えられた小さな陥込みは、6基検出されている（第16図）。いずれも8層との層界面に表出（図版09-1）したもので、7層の暗褐色した砂土が陥入していた。径は12～20cmを測り、その深さは5～9cmのものであった。これらの坑跡は、砂質層ということもあって、坑壁は貧弱で、坑跡としては捉えやすいもののなか、ということでも判らないものもあった。しかし、この陥込みがなにがしかの成因によるものであることは間違いないものとはいえ、柱穴跡だ、と断定する顕著な根拠は見当らなかったのである。

#### （4）遺構と遺物の関係

本層から出土した遺物は、石器剝片及び碎片と、そして炭化物の2種類であって、土器類はみられなかった。これらの遺物の大半は、とくに石器剝片などは8層との層界に出土（図版05-3）し、またSK17では3点（石器剝片・礫片・炭化物）の伴山物がみられるなど、層位的に7層に包含したものであると明確にいえるものであった。そして平面的分布状況（第17図）からみると、それらの遺物

遺構	短径 cm	長径 cm	深さ cm	検出面標高 m	摘要
P 01	21.0	—	9.0	468.683	
P 02	12.0	13.0	6.0	468.683	
P 03	14.0	16.0	5.0	468.673	
P 04	13.0	19.0	6.5	468.718	
P 05	12.0	19.0	6.0	468.713	
P 06	17.0	18.0	—	468.763	
SX01	100.0	150.0	(約)23.0	468.678	焼石・炭化物
SK15	—	—	12.0	468.683	坑上に1石の配石
SK16	27.0	50.0	8.0	468.703	
SK17	67.0	119.0	12.0	468.703	
SK18	36.0	44.0	9.1	468.733	坑上に8石の配石

現地表面標高469.803m

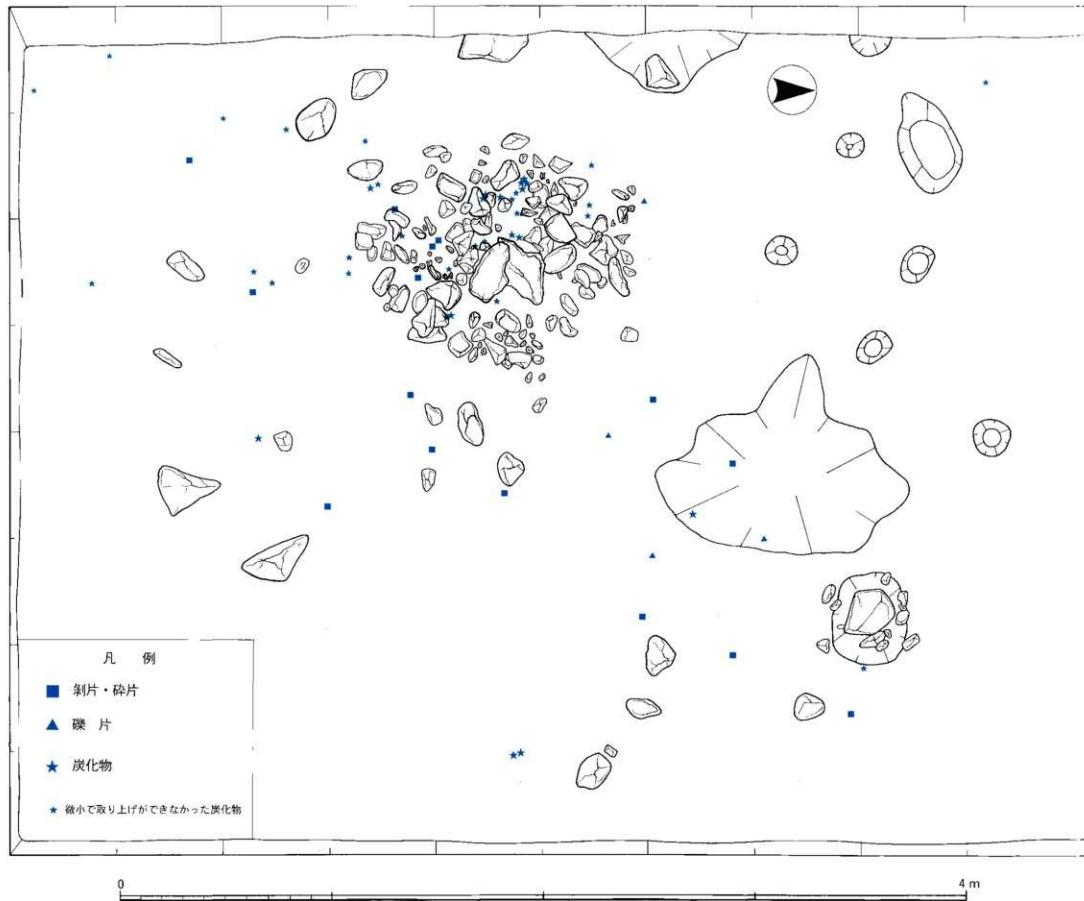
（ ）内は高さ、—は不明を示す

はSX01（集石炉）を中心に、とくに炭化物は顯著であり、またSK17上坑の周辺にも捉えられるだけのものが検出されているのである。しかし、これらの遺物が原位置であったものかについては、多少の疑問が残る。と、いうのも前項の「遺構の検出」でも指摘しているように、上流に当る北側からの河流による流入によって、遺物が流動したことが窺われるからである。それは遺構が顯在する北半には遺物が空疎であること、そして遺構に伴うと認められるSX01やSK17での遺物の出土状況においては、その遺構を中心にして、南側へ扇状的分布をしていることなどから想定できるものといえるであろう。

なお、本層に順層すると想定されるA区の7層においても、凝灰岩質の礫片2点が出土している  
(第3表・第4表)。(渡辺友千代)



礫群（集石炉）の実測風景



第17図 第7層出土遺物状況図

## 第4章 出土遺物

### 第1節 出土土器

#### 1. はじめに

本発掘調査にかかる出土遺物は、土器類・石器類を合せ、約300点余りが出土している（炭化物は除く）。そのうち土器片は100点が出上し、それは3層上位の20点、3層下位の80点とに凡そ仕別できるものであった（第3表）。

これらの土器について、発掘した順にしたがって（上位から下位へ）、代表的あるいは特徴的なものを取り上げ、その施文や調整方法などについて、以下観ていくことにする。

#### 2. 實測土器（第18～20図・図版11-1～2）

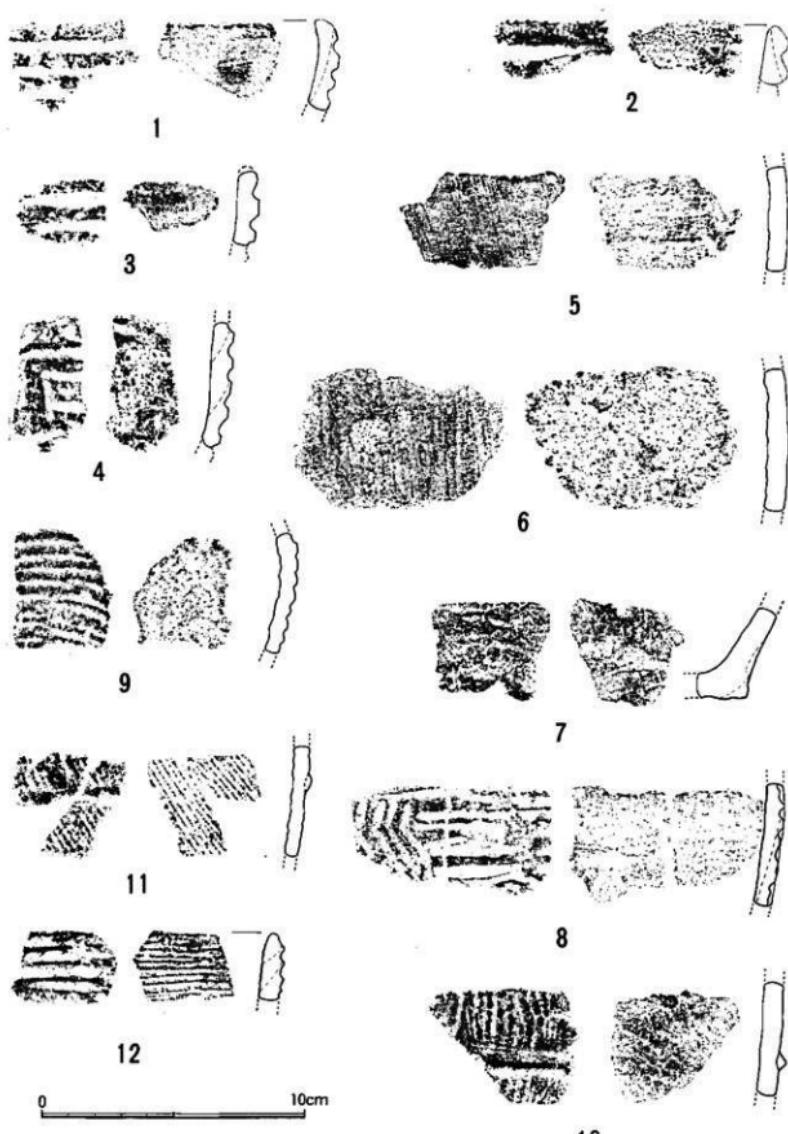
##### (1) 土器観察

1～7は、1・2層から出土したものもあるが、凡そ別称の1黒とした3層の灰褐色粘質土（3層上位）に検出されたもので、層位のあるいは施文・調整方法から恐らく縄文後期前半のものと想定されるものである。

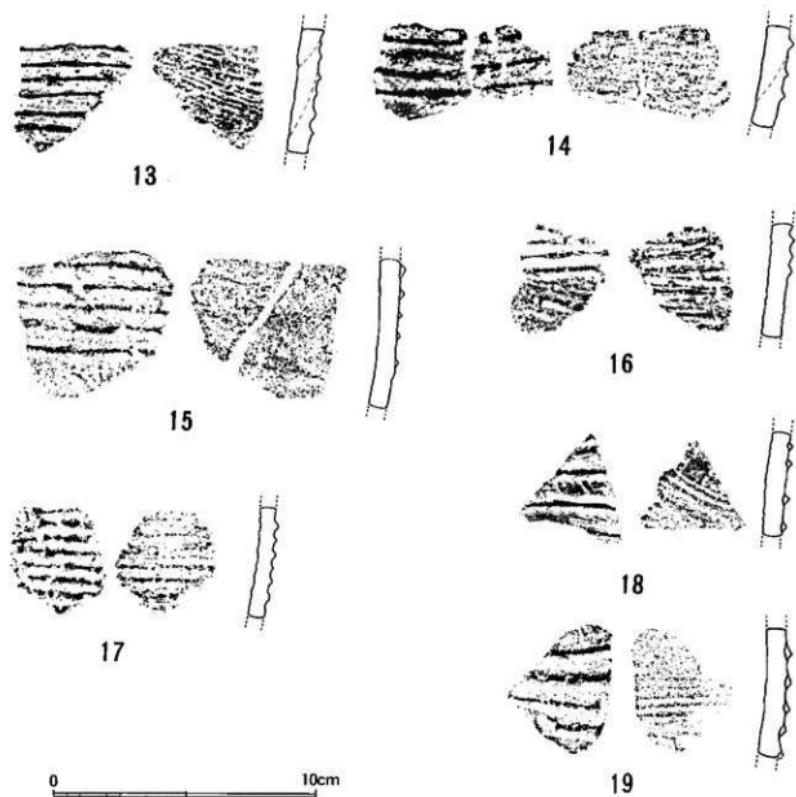
そのうち1～4は有文上器片で、1～3は口縁部外面に数条の横位の沈線を施したものである。その1は、3層上位から出土したもので、外面に3条からなる太めの沈線が施文され、それらは太さからして箸状の施文具が使用されたらしく、円みをおび、その施文面はきわめて艶麗である。内外面はヘラミガキの調整で、胎土には2～3mm大の石英を含む。また色調は淡赤色を呈しているが、研磨部分は暗褐色で、器形は椀状の精製系の浅鉢とみなされる。つぎの2は、施文の仕方が前述した1に似る。しかし沈線は1本しか確認することはできないが、下方の破損部に向って円みをおび狭まっていく様子から、2条は施文されていたことが看取できる。なお調整は内外ともナデで、厚さは12mm測り、粗製系である。そして3は、少なくとも3条の平行沈線があったことが認識できる精製系の土器片。沈線間には縄文、また磨消した手法がみられる。外面は明赤褐色であるが、内面は暗褐色である。4は、外面に窓枠状の沈線を施文した口縁部と思われるもの。内面はケズリ調整の後、ナデ仕上げである。胎土には2～3mm大の砂粒がみられ、色調は橙褐色を呈しているが、外面には部分的に煤が付着し、焼成は堅緻。

5は、3層の灰褐色粘質土（3A層）に出土した胴部片。外面はヘラミガキで、暗褐色。また内面は条痕地で、色調は橙褐色である。6は粗製土器片。外面は縦方向の巻貝による条痕文で、橙褐色を呈し、内面は摩滅していて調整方法は詳かでない。胎土には2～3mm大の石粒を含み、やや厚手。7は、3層上位から出土した粗製系の底部片で、内外面ともナデ調整である。接地面はベタ底と思われ、外辺端を貼付ける。外面の色調は淡赤色で、内面は淡赤～褐色を呈する。胎土には2～3mm大の石粒を多く含み、焼成とも粗製である。時期については出土層位、あるいは胎土の粗密性や色調などからみて、上述している土器片と同様のものと考えられ、おそらく縄文後期の前半のものと想定される。

8・9は、本調査区の北端の人為層ともいべき2層に出上した胴部片。外面には短い平行沈線、



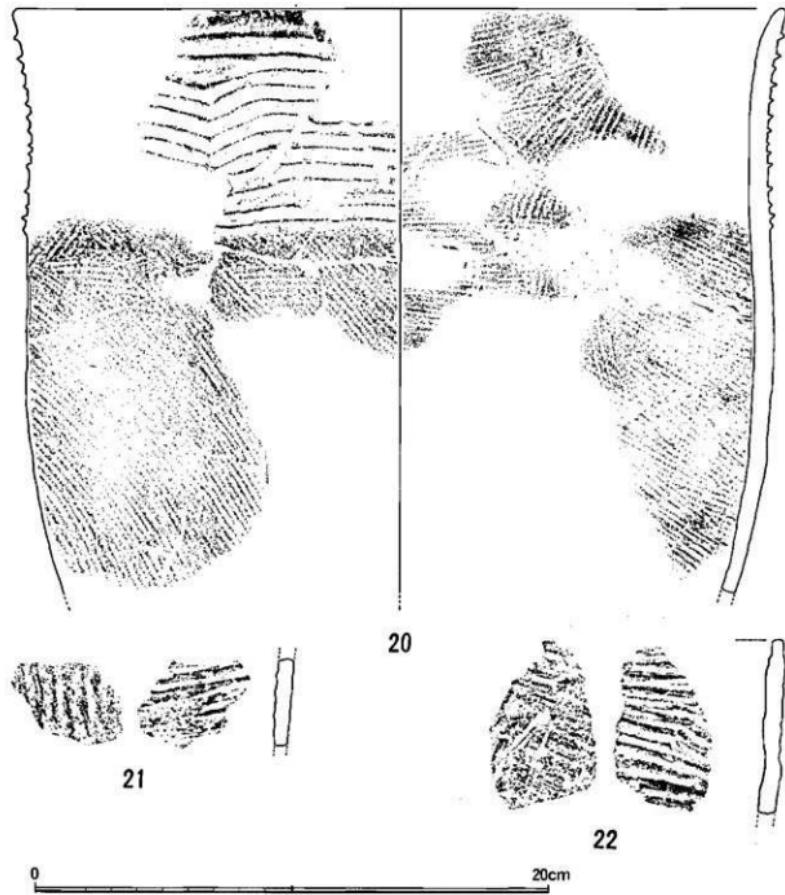
第18図 出土土器実測図(I)



第19図 出土土器実測図(2)

あるいは「く」の字状の羽状文が施されている。内面は横方向のナデ調整で、胎土には滑石を混入させているが、全体的には内面側とも灰褐～赤褐色である。厚さは3～5mmを測って、やや薄手の曾畠式の土器片である。9も8と同様の縄文前期後半に位置付けられる曾畠式の胴部片。外面には曲線おびた多条の短弦線を施し、外面は淡赤褐色、内面には煤が付着していて暗褐色を呈している。なお、本片の出土位置は前述の8と同様で、北端の客土であった。したがって、これらの出土状況からみて、やや標高の高い北面側の強い削平等によって、混入したものと判断された。おそらく本来の層位でいうなら、本調査の層位（第6図・図版9-2）でいう3層の黒色粘質土（3C層）であったかと想像される。

10～20は、想定した以外の層位（例えば耕作土など）から出土したものも数点あるが、大半は3層の黒色粘質土（3C層）から検出された轟式土器片である。



第20図 出土土器実測図(3)

そのうち10・11は、外面に横走状のミミズばれの隆起帯文が1本みられるもので、前者の調整は縦方向の条痕地である。また内面はナデで、煤が付着する。外面の色調は明赤褐色、胎土には石英や雲母を含み、焼成は良好である。後者の11は、施文や調整、あるいは色調においては10と同様であるが、条痕地が斜向、また内面も条痕文という違いがみられる。とくに隆起文は半円みおびるが、10は三角形を呈し、その頂部はやや下方に垂れている。12は口縁部片。外面の3条みえる隆起文は、狭く、しかも低いが頂部は尖っていて、上方に向く。内面は横走状の条痕文で、両面とも暗褐色である。胎土は緻密、焼成はきわめて良好である。

13は、外面の隆起端が「人」の字状に細く高まったもの。内面は傾斜状の条痕で、色調は淡茶褐、外面には厚い煤が付着している。14は、外面の隆起文が数条の横走状であるが、やや弧状気味で、やや行間が空いている。胎土には2~3mmの大石英が混入していて、器厚は9mmを測って厚い。色調は橙褐色、焼成はやや粗雑である。15は、外面の隆起文の高まりが比較的低く、しかも頂部は円みおびていて鈍いもので、下方は斜向方向の条痕地である。内外面とも橙褐色で、胎土は比較的緻密、焼成は良い。

16は、外面の隆起帯がきわめて低いものの、その頂部は尖っていて、鋭利さがみられるもので、下半部は斜向の条痕地で施文したもの。また内面は斜向の条痕文、胎土には2~3mmの大砂粒を含み、器厚は5~6mmを測って比較的薄手のものである。17も、多条の隆起文帯をもった口縁部片。その外面の隆起文は、余り高まりではなく、しかも頂部形は鈍く、行間が詰まっている。内面は横方向の条痕文で、胎土には多くの砂粒を含んでいて、やや粗い。色調は、外面は酸化鉄分が付着していて橙褐色、内面は黄灰色を呈している。18は、隆起文は細く、その頂部は尖り、行間は幅広い。また、その隆起文の調整はナデで仕上げているが、文様帯の素地は条痕であったらしく、ナデ調整の下地に確認することができ、したがって文様帯は、貼付けられたものである。内外面とも酸化鉄分が含浸していて淡茶色であり、焼成は堅緻。

19は、外面の隆起文が緩曲線を描くもので、その行間は三角状施文具を用いたものらしく、凹線文風にみえるものである。本片も前述の18と同様、隆起文帯部分は条痕文地の調整面に貼付けられている。胎土は緻密、また色調は内外面とも橙褐~灰褐色を呈している。大片の20は、3層黒色粘質土(3C層)のSK06土坑隣辺に破損していたものである(第12図)。

21・22は、3層黒色粘質土(3C層)から検出された条痕文土器片。その条痕の条脈間が幅広いことからハイガイによる施文と思われる。胎土には金雲母がみられ、緻密である。色調は橙褐色で、焼成はきわめて堅緻。また22は、内外面とも条痕調整の口縁部片で、色調は暗褐色を呈している。口縁部の立ち上がり方には、余り屈折部分ではなく、僅か外返するものの、おそらく垂直に近いものと思われ、その口縁部は角ぼっている。胎土は緻密、焼成は良好である。これらの両者は、層位または調整方法からみて、轟式土器に伴う粗製系のものと想定される。

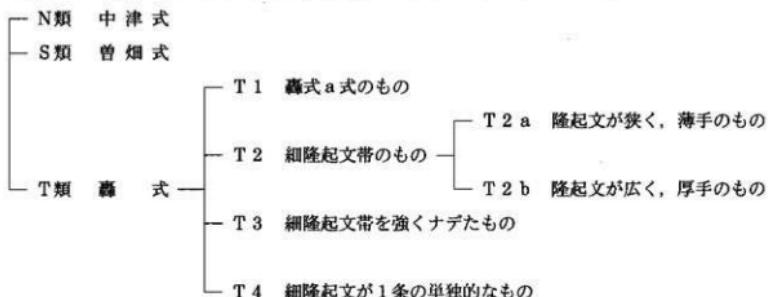
## (2) 土器の分類

土器の施文あるいは調整方法などからみてきたが、末尾のここで簡単に分別しておこう。その1つは、1~7の太くて深い沈線などで施文した中津式の特徴をもった部類がまず挙げられるだろう。これらは1・2層に混入していたものもあったが、主に3層上位(本調査区でいう3A層)に10数片出土したものである。また、つぎの8・9の曾畠式のものは、曾畠式と断定するものは他には一切みられず、極めて僅少であった部類のものである。しかし2層という出土層においては問題があるが、ただ調査区北側の標高が高かったと想定される位置に出土したものであることから、強い削平などによって移動し、混入されたことも充分考えられるので、まったく現行位置だけのみで判断はできないものと思われる。したがって恐らく本来は、3層中、それも中津式系とは時間差をおくとみられる3層中位以下(3C層の黒色粘質土)に包含していたものと想像されるのである。3つめに挙げられるのが、本遺跡において約80片という最も多く出土した轟式、あるいはその系統の土器であろう。これらの

10~22の轟式系の上器は、凡そ b 式で包括できるものであるが、第20図の22のように轟 a 式の特徴をもったものもみられるのである。

轟式の b 式、いわゆるミミズばれの細隆起文を細くみていくと、4つのタイプに分別することができるようと思われる。その1つは、第18図-12・第19図-13・16・17・第20図-20のように、隆起文の間が狭く、やや薄手の類が、まず言えそうである。そして2つめのタイプは第19図の14・15・18・19のように、隆起文帯が条痕文地に貼付けられ、その隆起文の間が前者よりは幅広いというものである。このタイプは、前者に比べるとやや厚手で、ナデが施されていて、美麗なものもみられ、色調は灰褐色系である。また3つめのタイプは、第20図-21に図示しているように、隆起文を強いナデで施文したようにみられるものの類である。そして4つめは、第18図-10・11のように、単独的な1条の隆起文と思われるもので、b 式であることは間違いない、このタイプの色調は明赤褐色で、薄手であるものである。

以上3つに分類できるものと思われ、図式すると以下のようなものになる。

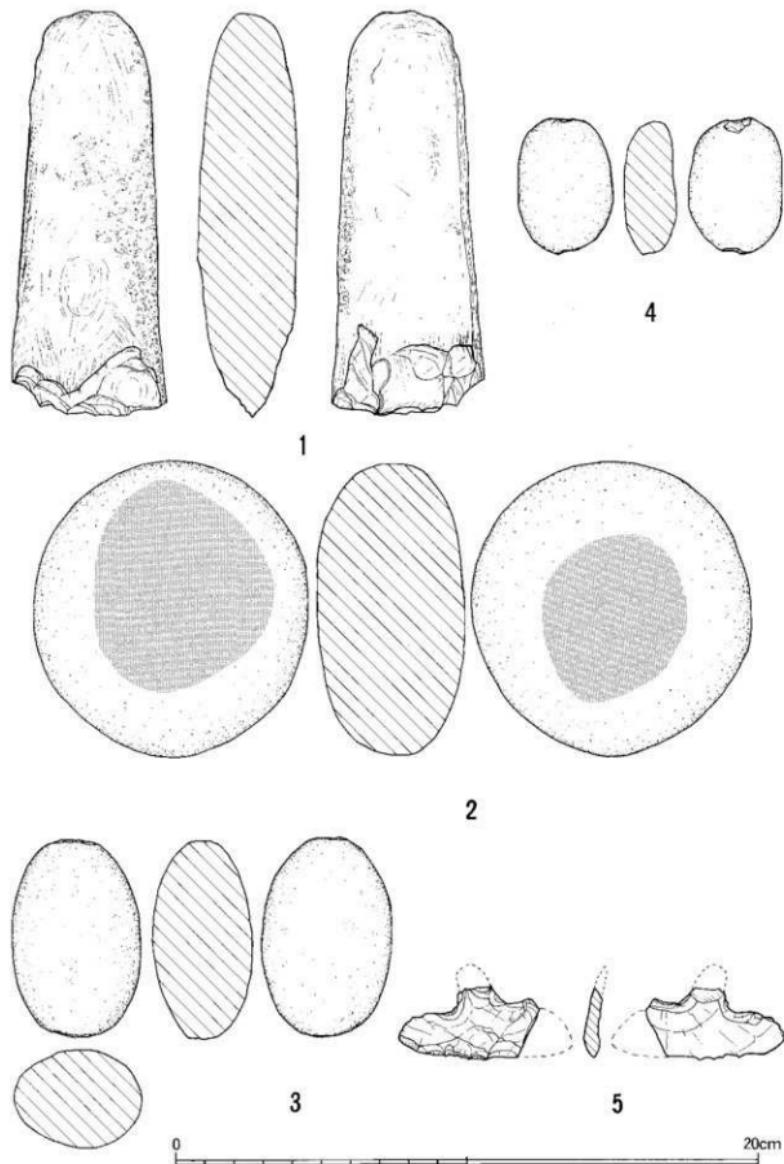


## 第2節 出 土 石 器

### 1. はじめに

本発掘調査にかかる石器類の出土数は、本調査区の1~3層上位から52点、その3層下位から81点、そして本トレンチの7層から17点（2点の小円礫は除く）、また他のA~C区の各調査区では34点の、合せて184点であった（第3表）。これらの石器のうちの大半（約82%）が石器剝片・碎片あるいは礫片で、石鏃（14点）・石匙（4点）・削器（3点）などのはっきりした利器といえるものは18%に過ぎなかった。そしてこれらの石器類は、3層下位と層別した層位に最っとも多く81点が出土している。石材においては安山岩を多用しているが、3層以上には黒耀石も数10点（剝片43点・石鏃3点）が出土している。

なお、これらの石器類は、人為層ともいえる1・2層においては層名のみを記して取り上げているが、3層またはその以下のものは全て原位置記録法で行った。また図掲については、利器としての石器類を最初に、大形なものから小形のものへと順立てている。



第21図 出土石器実測図(I)

第3表 1～7層出土遺物集計表

出土層位	土器片	石器剝片	黒曜石片	石 錐	石 匙	磨製石斧	削器・ 搔器	石 錐	凝灰石	石 核	磨 石	縫 片	炭化物
1～3層上位 (本調査区)	17	31	14 (乳白色点・黒曜石点)	3	3		1						
3層下位 (本調査区)	80	45	21 (黒曜石点)	8	1	1	2	1	1	1		1 3～5cm のもの数 10点	
7層		5		(1)			(1)					12 0.5～1cm のもの数 10点	
A区1～3層上位		2	1	1									
A区3層下位			1									1	2
A区7層													2
B区1～3層上位	3	2	1									1	
C区1～3層上位		10	7 (乳白色点)										
C区3層下位		1											
合計	100	96	44	14	4	1	4	1	1	1	1	17	100点余り

## 2. 3層までの実測石器（第21～23図・図版11-1～図版12-1）

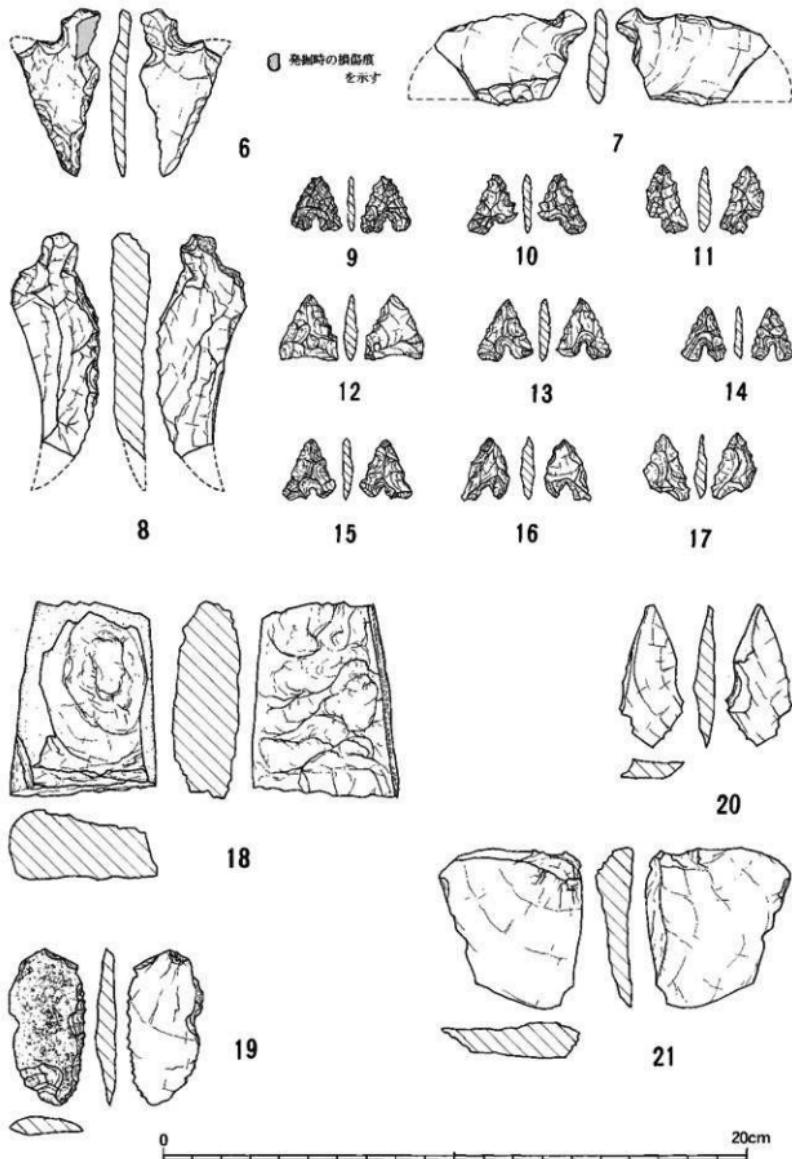
## (1) 石器観察

1は、3層下位から出土した安山岩質の磨製石斧。刃部は損破し、その損破部までの器長は13.5cmを測る。また刃部に最大幅がある5cm、最大厚は胴身中央部で3.1cmを測って、重さ約310g。とくに側辺には成形のための敲打痕が顕著で、表裏面にも多少のこっている。2は、B区の3層上位に出土した花崗岩製の磨石。短長径とも9cm余りを測った円形のもので、その厚さ4.8cmである。表裏には人為によると想定される磨痕によって、半滑であり、また側縁部の一部には、敲打による打裂痕もみられる。おそらく河原の円礫を用いたものであろう。3は、3層下位から出土した稜形の敲石。材質は花崗岩で、河原の円礫を用いたものと思われる。両端部には敲打で打裂されて平坦となっているが、他には人為的な使用痕らしいものは見当らない。4は、砂岩系の円礫を用いた石錐。器長4.5cm、器幅3.1cm、器厚1.7cmの小振りのもので、重さ33.5gである。両端部は打欠いており、その痕跡は裏面（腹面）側に顕在する。

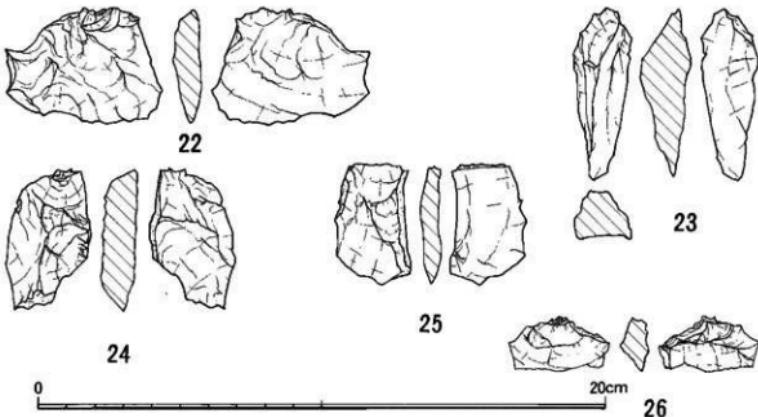
5～7は石匙。いずれも1・2層から3層上位にかけて出土したもので、材質は安山岩である。このうち5・7は灰褐色に腐植しており、凝灰岩系のもので、6は角閃石系と思われるもの。5～7は横形と考えられるが、ツマミが極端に左方に偏在する6は、縦形と捉えた。なおこの6は、とくに刃部の剥離調整が細かく、右縁部においては腹面にも調整を加え、器厚は薄い。また5・7はその点、急斜度に剥離を施し、やや深形の調整である。なお8も様形から石匙とみているが、調整や機能からみると搔器に近いものと思われるもの。それは上端のツマミ部分とみられるものが、損失したとしても片面の表皮自然面の形成上からツマミ部分とは認識できるものではないこと、また器厚もぶ厚く、刃部面が余りにも急角度などから窺えるのである。その削器は玄武岩系安山岩で、1・2層に出土したものである。先端部は欠損しており、その器長7.7cm、最大幅2.4cm、最大厚1.1cmを測って、重さ24.2gである。縦剥ぎされた後、2次加工として側辺から成形されている。稜線は、したがって横方

第4表 7層出土遺物観察表

地区	取上番号	種目	石 材	法 量	出土地点 標高 (m)	水系標高 469.803m レヴェル (m)	坪図番号	摘 要
本 下	No01	礫 片	凝灰石安山岩		468.693	-1110		
	No02	礫 片	凝灰石安山岩		468.723	-1080		
	No03	炭 化 物	-		468.733	-1070		
	No04	礫 片	凝灰石安山岩		468.733	-1070		
	No05	炭 化 物	-		468.793	-1010		
	No06	剝 片	角閃石安山岩		468.723	-1080	図版12-2 下段左	
	No07	礫 片	花崗岩系		468.733	1070		
	No08	炭 化 物			468.733	-1070		
	No09	炭 化 物	-		468.723	-1080		
	No10	礫 片	凝灰石安山岩		468.713	-1090		
レ ン	No11	礫 片	凝灰石安山岩		468.723	-1080		
	No12-1	礫 片	凝灰石安山岩		468.713	-1090		
	No12-2	碎 片	角閃石安山岩		468.713	-1090		
	No13	礫 片	蛇紋岩系		468.763	-1040		
	No14	炭 化 物	-		468.713	-1090		
チ ン	No15	炭 化 物	-		468.703	-1100		
	No16	剝 片	角閃石安山岩		468.723	-1080	図版12-2 下段中	
	No17	炭 化 物	-		468.753	-1050		
	No18	碎 片	角閃石安山岩		468.723	-1080		
	No19	小円礫片			468.733	-1070		
チ ン	No20	剝 片	角閃石安山岩		468.713	-1090	図版12-2 下段右	
	No21	小円礫片	泥岩系		468.683	-1120		
	No22	礫 片			468.663	-1140		
	No23	二次加工 ある剝片	角閃石安山岩		468.723	-1080	第24図-1	
	No24	二次加工 ある剝片	粘板岩系		468.693	-1110	第24図-2	
地区	No25	礫 片	凝灰石安山岩		468.673	-1130		
	No26	炭 化 物	-		468.683	-1120		
	No27	炭 化 物	-		468.688	-1115		
	No28	礫 片	凝灰石安山岩		468.593	-1360		
A 区	No29	礫 片	凝灰石安山岩		468.603	-1350		



第22図 出土石器実測図(2)



第23図 出土石器実測図(3)

向からの加撃によって、弧状剥離面となり、縦方向に走っている。

9~17は石鎌である。このうち9~11は黒耀石製で、他の12~17は安山岩質製のものである。そのほとんどは3層上位、あるいは1・2層からのものであるが、11はSK12の土坑内から、また12はB区の2層から出土したもの。これらの石鎌には茎部を有するものではなく、すべてが無茎鎌であるが、形態的に特徴を有するものは9~11・13・14・15などの鉗形の石鎌であろう。とくに黒耀石を用いた石鎌は、基部の抉りがU字形を呈し、その特徴が顕著である。また12は、基部が平坦を成しており、三角鎌といえるものである。12は、剥離面が全体におよんでいない形態からみて、おそらく剥片を利用して仕上げた剥片鎌といえるものであろう。

18は、凝灰岩質の残核で、母岩の背側片である。長さ6.5cm、幅4.7cm、厚さ2.1cmあって、重さ90.3gのもの。上下の両端から加撃されたらしく、その断面は階段状に裂破する。また背面にも单一打裂の二次的な加撃がみられ、他は表皮の自然面である。19は、角閃石安山岩製の削器で、器長5.4cm、器幅2.4cm、器厚0.5cmを測る。表皮の背面に浅形の細部調整が施され、腹面は母岩から剥されたままの单一打裂痕のみがのこり、二次的な調整はみられない。20~26は石器剥片あるいは石核。そのうち20は、3層下位から出土したナイフ状の剥片。材質は凝灰岩質のもので、側辺からの加撃によって、弧状の稜線を背腹面につくってナイフ状を呈しているが、二次加工としての調整はみられない。21・22は、3層上位に出土したもの。いずれも單一剥離した剥片で、二次加工はみられないもの。23は、三角錐を呈した石核。主たる剥離は縦剥ぎによるものであるが、一面には横方向からの剥離痕がのこっている。24・25は、一面に表皮の自然面がのこっているもので、残核の剥片である。26は、2層から出土した黒褐色の黒耀石片。加撃は一向向からのもので、二次加工や調整痕はない。

## (2) 石器類の出土傾向

土器類の分類によって、3層においては3つの文化期に仕分けすることができたが、石器類につい

ては該当文化期に明確に分別することはできない。ただし遺物包含層の3層において、3層上位（1・2層も含んだ3A層）と3層下位（遺構内も含んだ3B層）とに仕別してとりあげた結果、上位のものは中津式併行期のもの、また下位のものは轟式併行期のものとに凡そ土器から分別できたのである。そのことは、共出した石器類においても同様な傾向性として捉らえるならば、2つの文化期に分別することは可能と考えられるので、ここではそれらのことを踏えた上で、気付いた点について若干のコメントをしておくことにする。

石器類を利器としての加工石器、そしてそれ以外の石器剝片とに類別してみると、本遺跡では82%との大半が石器剝片・碎片類であった。一方、これを本調査区の3層においての上位では84.1%、下位では77.3%という比率で石器剝片等が占めていたのである。つまり、下位の方が加工石器が若干多いということになり、これは、8点という石鏃の数によるものであろうと思われる。そしてこの剝片や碎片は、径5cm以下の細片が大半を占めている、その比率は下位で出土したものがより高かったのである。また、注意されるのが黒耀石の剝片・碎片の出土比率の高さで、本調査区の3層においては、上・下位とも剝片中の約50%が黒耀石片で占められているという事実である。なお、C調査区の3層上位に限ってみると、安山岩系の剝片10点に対し、黒耀石片は7点という意外性が目を見張ったのである。そして僅か2点であったものの、乳白色（姫島産）の黒耀石は3層下位ではなく、中津式併行期としている3層上位で検出されている、ということを考えさせられる資料であった。

また利器として用いた加工石器で最も多かったのが石鏃である。本調査区の3層下位で8点、上位で3点、そしてA～C区の調査区で3点の順で出土し、計14点であった。そして石匙の4点、次で3点のスクレイパー類となり、磨製石斧・石錐・磨石などに至っては各1点ずつあって、全体的に少ないという感じがする。その僅少の材料から一概にはいえないが、そこには狩猟を主とした田中ノ尻周辺の立地性がみえてくるような気がしてならない。

(渡辺友千代)



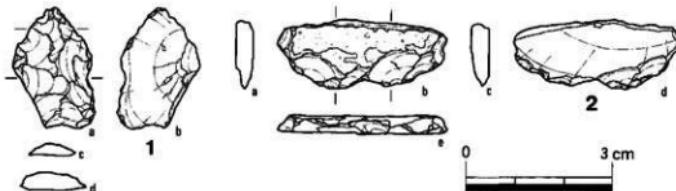
集石炉を見学する清原茂治教育長をはじめとする  
島根県教育委員会の一一行

### 3. 7層出土石器（第24図・第4表・図版12-2）

7層では、集石遺構を検出した本トレンチ部分で、4m×7mの範囲にわたって調査が行われているが、出土遺物は少なく、石器、剥片類7点と、炭化物などが出土したにとどまっており、十分にその時期的、文化的特徴を検討できるまでにはいたっていない。石器、剥片類の内容は、二次加工ある剥片2点、剥片3点、碎片2点であり、使用石材は、安山岩6点、粘板岩系の石材1点である。安山岩については、肉眼観察ではあるが、広島県冠山地域産安山岩と類似している。

第24図には、二次加工ある剥片2点を示してある。1は、石器未製品と考えられ、長さ2.48cm、幅1.7cm、厚さ4.1mmである。安山岩製。素材剥片背面（a面）の、図面でみると上半部を中心に二次加工を施しており、先端部を作り出そうとしているが、完成までにはいたらなかったようである。なお、素材剥片主要剥離面側（b面）の、図面でみると右下半部は、欠損しているが、この部分は、打点のすぐ脇にあたり、また、ちょうどここに不純物が挟在しており、素材剥片を剥離した際に副次的に欠損した可能性がある。2は、岡でみると上端部が折れ面となっているが、長さ3.45cm、幅1.42cm、厚さ4mmであり、粘板岩系の石材を使用している。素材剥片の縁辺に、両面から二次加工を施しており、そこを刃部として使っているようであり、刃器的なものと考えられる。なお、刃部は、全体に摩耗しており、これは、使用によるためと考えられるが、摩耗が進んでいるのは、石材が比較的軟質であることも係わっているとみている。

(竹広 文明)



第24図 第7層出土石器実測図

## 第5章 匹見町田中ノ尻遺跡の遺構とテフラ層

### 1. 調査地域

島根県美濃郡匹見町道川出合原、匹見川右岸の谷底平野に位置し、匹見川の河床面からの比高約6mで、小段丘状の地形をなす。かつては水田であった。

### 2. 目的

遺跡断面にみられるテフラを分析し、そのテフラの降下年代から遺構の造られた時代を検討する。

### 3. 発掘地の断面の概要

最上部の①層は耕作土であり、人為的な影響が大きい。②層は酸化の進んだ橙褐色土で、人為的な影響が加えられている可能性もある。③層以下は氾濫原性の砂混じり堆積物で、③層および⑤層、⑦層は黒色系を呈しており、土壤化が進行している。これらは、ある一定期間、地表面として植生に覆われたことを示唆している。⑥層には大きな円礫が含まれており、かつての川底に堆積したものである。

### 4. 分析方法

試料採取地点は本調査区の西壁とA調査区北壁の2地点である。遺跡の断面各層から採取した土壤、約20gを試料として分析した。試料は水で洗浄し、粘土・シルト分を除去し、乾燥した後、篩にかけて125~88μの粒子を選別し、スライドグラスに接着して、偏光顕微鏡で観察した。粒子約400個について鉱物種の同定を行った。

### 5. 分析結果

純粋な降下テフラ層は存在しなかったが、断面各層から少量の火山ガラスが検出された。火山ガラスの含有量は④層~⑥層においては、1%前後と非常に少ないが、①層~③層でやや含有量が高い。こうした傾向は本調査区とA調査区に共通する。③層はいわゆる黒ボク層である。

火山ガラスの形態からみて、これらの火山ガラスは姶良Tn火山灰〔AT〕とアカホヤ火山灰〔K-Ah〕起源であることは間違いない。火山ガラスの色調からみて、③層より上層にはアカホヤ火山灰に特徴的な褐色のガラスが混在している。

これらから、⑧層~④層はAT起源のガラスを含み、③層より上にはATとアカホヤ火山灰起源の両方のガラスを含んでいると判断される。このようなテフラの関係は本遺跡の対岸、新樹原遺跡においてもすでに報告されている(三浦・松本、1987)。ただ、新樹原遺跡の場合、⑦層に相当する層より上にしか火山ガラスが存在しないとされており、最下部の河床疊層からは火山ガラスの存在が確認されていない。

### 6. 考察

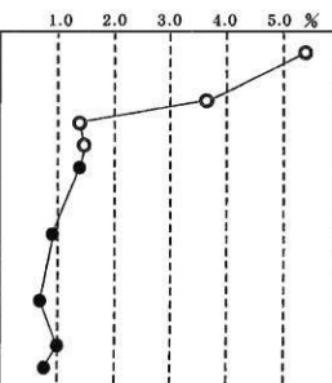
ATの降下年代は2.1~2.2万年改正前(町田・新井、1976)、アカホヤ火山灰の降下年代は6000~6600年前(町田・新井、1978)と考えられている。従って、本地域にみられる地層は、すべて、AT降下以降の約2万年前より新しいものであるといえる。また、③層より上層はアカホヤ火山灰の降下以降の6000年前より新しい時期の地層であることになる。

### 本調査区西壁

#### 地表面

20	①層	水田耕作土
10	②層	橙褐色土(酸化鉄)
	③層	灰褐～黑色粘質土
60	④層	黃褐色粘質土
30	⑤層	暗褐色砂質土
30	⑥層	黃灰色砂土
10	⑦層	灰褐～暗褐色砂土上
cm	⑧層	黄灰色円礫層 遺構 (河床疊)

#### 火山ガラスの含有量



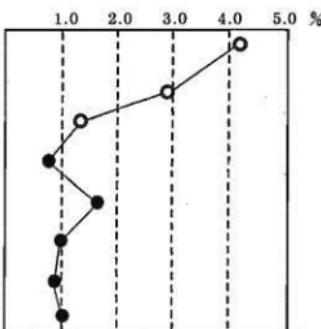
### A調査区北壁

#### 地表面

25	①層	水田耕作土
5	②層	橙褐色土(酸化鉄)
15	③層	灰褐～黑色粘質土
15	④層	黃褐色粘質土
15	⑤層	暗褐色砂質土
15	⑥層	黃灰色砂土
10	⑦層	灰褐～暗褐色砂土上
cm	⑧層	円礫層

①層～⑧層：発掘の層序

#### 火山ガラスの含有量



○：アカホヤ (K-Ah) のガラスを含むもの  
●：始良 (K-AT) のガラスを含むもの

図1 四見町田中ノ尻遺跡の層序と火山ガラスの含有量

本地域の遺構は⑧層堆積後、⑧層表面における生活跡を示している。テフラから判明する年代からみると、約2万年より新しく、6000年前（縄文前期）より古い時期の遺構であることは確実である。詳細な年代の特定は困難であるが、地層の上下関係からみて、縄文早期から旧石器時代に該当すると考えられる。

（林 正久）

#### 文 献

- 町田 洋・新井房大（1976）広域に分布する火山灰—姶良Tn火山灰の発見とその意義—、第4紀研究、Vol.17、143～163
- 町田 洋・新井房大（1978）南九州兔界カルデラから噴出した広域テフラ —アカホヤ火山灰—、科学、Vol.47、339～347
- 三浦 清・松本岩雄（1987）旧石器および縄文遺跡としての「新根原遺跡」におけるテフラの産状、山陰地域研究—伝統文化編一、No.3 1～9。

## 第6章 小 結

本遺跡における文化包含層は灰褐色～暗褐色砂土の7層と、灰褐色～黒色砂土の3層であった。このうち遺物・遺構が共存した7層は、新櫛原遺跡の層準からみても縄文時代早期以前のものであったと考えられた。また灰褐色～黒色粘質土の3層では、人別して2文化期の存在が認められている。つまり下位（3B層）を中心に、縄文時代前期前半の縄式併行期（同後半に編年される僅少の曾畠式も含めて）のもの、上位（3A層）を中心に縄文時代後期前半の中津式併行期の2期である。

### 第1節 第3層出土の遺構、遺物について

さて3層における見解であるが、3層の下位、つまり4層との層界に検出した遺構は、層位的にみて、また遺物の垂直分布からも縄式併行期のものと想定できるものであった。それらの遺構は、全て該当期の原形を保っているとは限らない（3層中位あたりから構築していたものと考えられるから）が、少なくとも遺していると想定される数基の十坑状遺構からは、長径約2.数mまた約1.数mの長椭円を呈したものであったことが想像される。しかもそれらの原形を保っていると想定される土坑の長径は東～西にあって、つまり太陽の出没方向であった可能性が強いと考えられる。また数基の十坑には配石らしき河原の円礫が配置され、とくにSK12土坑では立石し、且つ墓域あるいは結界域を表徵するかのように、坑上に周囲して配されていたのである。一方、これらの数基の坑内には炭化物、あるいは焼土も検出したものもあって、また坑壁に柱穴状のピットが頗る在したものも確認されたのである。さらにこれらの14基検出された土坑遺構を配置的な構図からみれば、あくまでも恣意的ではあるが、径約10m測って円周して設定されているようにもみえたのである。

しかしこれらの遺構と共に遺物においては、そういった遺構の特殊性を見出すものはなかった。ただ加工石器において、石鏃・石匙・スクレーパー類の些少の出土からは、そこには狩猟を主にした生活誌があつたらしい、ことのみが読み取られたにすぎなかつたのである。また中津式併行の文化期の存在が想定される3層の上層においては、上面を後世の人為による削平等が成されたらしく、また同一層内ということもあって、遺構は検出することはできなかつた。

（渡辺友千代）

### 第2節 第7層出土の遺構、遺物をめぐって

第7層検出の集石遺構については、遺構の発見時に、これに共存した遺物が僅かの剝片類のみであったため、その時期の確定が問題であった。第7層は、縄文時代前期縄式土器を中心とした遺物包含層の下位にあたり、層位的には、これを通ることは明らかであり、縄文時代早期以前ということは予測されたが、その具体的な時期についての手掛かりが十分ではなかつたのである。田中ノ尻遺跡に隣接する新櫛原遺跡では、火山ガラスによる堆積層の検討が行われており、新櫛原遺跡では、第7層から

始良丹沢火山灰が出現しはじめ、第6～第4層までは始良丹沢火山灰のみを含んでおり、第3層からはアカホヤ火山灰が出現しはじめるところから、第7層がほぼ始良丹沢火山灰下時、第3層がほぼアカホヤ火山灰下時の頃の堆積層と考えられている。<sup>(註1)</sup>こうした新樹原遺跡との対比から、田中ノ尻遺跡第7層の集石遺構の年代について、旧石器時代とみる見解も聞こえたのであった。このため集石遺構の位置付けを明確にするため、引き続き周囲の調査が行われたが、石器、剝片類などがあわせて7点出土したにとどまっており、今回の調査では、必ずしも十分な検討資料を得られているというわけではない。なお、本遺跡においても、火山ガラスによる堆積層の分析を実施しており、堆積層の年代を検討する参考資料が得られている。

石器、剝片類の検討では、二次加工ある剝片が2点認められ、そのうちの1点は、石器の未成品と考えられる資料であり、田中ノ尻遺跡の第7層に残された遺構、遺物の時期が縄文時代である可能性が強いことが分かってきた。その具体的な時期については、土器が出土しておらず、石器、剝片類が僅かであり十分にその性格を把握できないため検討できないが、縄文時代早期頃とみられる。集石遺構については、現状保存を前提とした調査となつたため、断ち割り調査などは行われていないが、その特徴は、径1.2m前後の大略円形の範囲に礫が密集しており、また礫は赤変したものや煤の付着したものも認められ、遺構内からは木炭片が密集して出土しており、本遺構が、火の使用にかかる施設であったことをよく示している。なお、調査時の所見では、集石の下位には掘り込みが存在するようである。こうした集石遺構は、縄文時代早期を中心として広く認められ、本例もこうした遺構として理解できると考えられる。火の使用にかかると考えられる集石遺構には、掘込みを伴う例と伴わない例の両者が認められ、中国地方では、広島県鴻の巣遺跡の縄文時代早期中葉の集石炉とされた<sup>(註2)</sup>例や山口県長浜遺跡第1地点の早期中葉とされた集石土坑などは掘込みをともなっているが、浜田市日脚遺跡の早中期中葉の集石遺構例は集石の下部に掘り込みが認めないとされている。田中ノ尻遺跡例は、こうした点からみると、下部に掘込みを伴う可能性が考えられ、前者の例に近いとみていい。ただし、本遺跡の例は、集石部分の径が1.2m前後と鴻の巣遺跡例や長浜遺跡例よりは規模が大きいようであり、その性格が同一であるかどうかが問題となる。これは、火の使用といった行為の中でも、炉としての利用や、それ以外の利用といった、機能の問題にも係わってくるが、これを議論するには、本遺跡例の下部の掘り込みの状況、あるいは、現在検出されている集石との関係などの特徴を明らかにしておく必要があろう。この点については、本遺跡を含め、今後の調査により検討していくべき。

また、ここで堆積層の問題について若干整理しておきたい。これまで匹見地域における発掘調査では、匹見町道川新樹原遺跡において黒色土と黄色土の交互堆積が認められ、このなかから層位的に遺物が出土するのが確認されている。同様の堆積層は、匹見町匹見上ノ原遺跡でも認められ、上ノ原遺跡では、河岸段丘のより高い面に立地しているとされている。<sup>(註3)</sup>今回の田中ノ尻遺跡の調査では、新樹原遺跡とは川をはさんだ対岸という近接した立地もあってか、同様の黒色土と黄色土の交互堆積を確認することができた。現状では、こうした堆積層の対比については、地質学的な調査など、これから研究によって時期的な関係をつかんでいく必要があると考えている。これらの遺跡で確認されている層序では、上層から、(1)第1黒色土、(2)第1黄色土、(3)第2黒色土、(4)第2黄色土の順に堆積

しており、新樺原遺跡、田中ノ尻遺跡では、これに続き、(5)第3黒色土、(6)砂礫層までが確認されており、上ノ原遺跡では、(4)第2黄色土（明褐色粘質土）の下位に、(5)明黄褐色極粘質土、(6)段丘基底礫層へと推移し、(5)の層は更新世の堆積層と考えられている。こうした層序の差には、遺跡の立地が一つには係わっているであろう。

これらの層序をもとに、遺物の出土状況を各遺跡でみると、新樺原遺跡では、第1黒色土（第3層）、あるいはさらには第2層から縄文時代前期、第2黒色土（第5層）から早期の遺物、第3黒色土（第7層）から旧石器時代とされる石器1点が出土している。田中ノ尻遺跡では、第1黒色土の上位面から縄文時代後期、中位～下位から前期の遺物が出土しており、第3黒色土から石器、剝片類が少量出土し、この中には1点ではあるが右巣未製品の可能性の高い資料が含まれており、縄文時代の所産であると考えられた。上ノ原遺跡では、第1黄色土、第2黒色土、第2黄色土にわたり縄文時代早期の押型文土器が出土している。これらの遺物の出土状況をもとに、火山ガラスの分析結果も踏まえ、予察的ではあるが、各遺跡の堆積層序の関係について、現状での問題点を指摘し、今後の調査の課題としておきたい。

1. (1)第1黒色土～(4)第2黄色土の層序は、その構成自体は各遺跡とも類似しているようである。各層準から出土した遺物からみると、(1)第1黒色土は、新樺原遺跡、田中ノ尻遺跡からすると縄文時代前期以降の層準と考えられ、両遺跡で実施されている火山ガラスの分析では、第3層から上位でアカホヤ火山ガラスが出現しており、これと矛盾しない。また、新樺原遺跡からすると、(3)第2黒色土から早期、上ノ原遺跡からすると(2)第1黄色土～(4)第2黄色土から早期の遺物が出土し、これらの層準の時期を示している可能性がある。ただし、上ノ原遺跡では、(1)第1黒色土にプライマリーなかたちで包含される遺物の時期が明確ではなく、以上の点を検討するには、この点を明らかにすることが必要である。上ノ原遺跡は、新樺原遺跡、田中ノ尻遺跡にくらべ、河岸段丘のより高い面に立地していることもあり、そして実際に、(5)層以下の状況を異にしている。以上3遺跡における(1)～(4)層についての層序の構成の類似性が、時期的にも対応関係にあるのかどうか、また、立地する段丘によっては異なるのかどうかなどの議論も、今後の調査により展開していくのである。また、こうした層序の成因も問われるところである。

2. 新樺原遺跡および田中ノ尻遺跡では、(5)第3黒色土から遺物が出土しており、新樺原遺跡では旧石器時代と考えられており、田中ノ尻遺跡では縄文時代早期頃と考えられたが、両遺跡ともに遺物の出土量が少なく、その細かな時期の特定が課題といえる。新樺原遺跡では、第3黒色土（第7層）から出土した遺物は「石刃状剝片」とされる資料であり、これのみからは時期を推定するのは難しいが、表面採集資料に「両面削り込み石器」など旧石器時代と考えられた資料が認められることや、火山ガラスによる堆積層の検討結果から、第3黒色土は旧石器時代の所産と考えられている。ちなみに、新樺原遺跡の堆積層の検討では、(5)第3黒色土から上位で姶良丹沢（以下ATと略）火山ガラスが出現し、しかも、アカホヤ火山ガラスは(1)第1黒色土（第3層）から上位でないと出現しないことから、第3黒色土（第7層）の層準がAT火山灰の下の頃をあらわすものとする見解が得られている。田中ノ尻遺跡では、アカホヤ火山ガラスの出現層準は、新樺原遺跡と一致するものの、(6)砂礫層からすでにAT火山ガラスが出現しており別の結果となっている。こうした、相違が、対岸に立地すると

といった地形、地質的な条件によるものか、あるいは、さらに別の原因によるものかが、匹見地域の旧石器、縄文時代を考える上でも、今後追及されいかなければならない課題といえる。

(竹広 文明)

- (註1) 松本岩雄編『新横原遺跡発掘調査報告書』島根県匹見町教育委員会、匹見、1987年。
- (註2) 川原和人・丹羽野裕編『口脚遺跡 口脚住宅用地予定地内発掘調査報告書』島根県教育委員会、松江、1985年。
- (註3) 河瀬正利・藤野次史『広島大学統合移転地埋蔵文化財発掘調査年報』暨、広島大学統合移転地埋蔵文化財調査委員会、東広島、1990年。
- (註4) 藤野次史・山本一朗編『長樹遺跡発掘調査概報 一宇部市西岐波区山村長樹所在遺跡第1地点・第2地点の調査一』山口県旧石器研究会、1985年。
- (註5) 中村友博編『島根県匹見町上ノ原遺跡の発掘調査』匹見町教育委員会、匹見、1995年。

#### 参考文献

- 栗田勝弘編『平草遺跡 大分県日田郡天瀬地区遺跡群発掘調査報告書』天瀬町教育委員会、天瀬、1982年。
- 益山 晃・中原 齊・瀧川友子編『長山馬鹿遺跡 県主要地方道倉吉～江府・溝口線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』溝口町埋蔵文化財調査報告書第5集 溝口町教育委員会、溝口、1989年。
- 中原 齊編『下山南通遺跡 中国横断自動車道岡山・米子線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥取県教育文化財団報告書21、鶴島坂井教育文化財団、鳥取、1986年。
- 戸沢充則・会山 進編『福沢押型文遺跡調査研究報告書』郷土の文化財16、岡谷市教育委員会、岡谷、1987年。

圖版〇一  
調查地點  
鳥瞰





調査地点遠景（北東から）

二



南西からみた調査地点

三



調査地点近景（南西から）

A調査区の北壁（南東から）



B調査区の北壁（南西から）

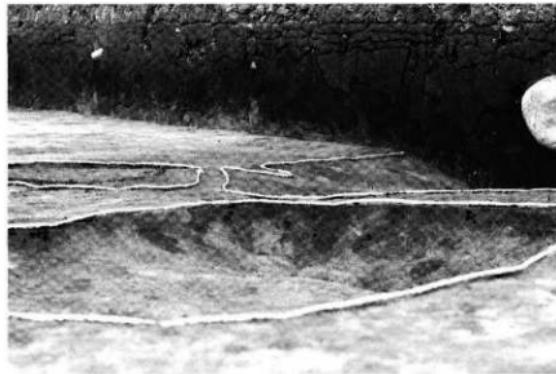


C調査区の北壁・東壁（南西から）



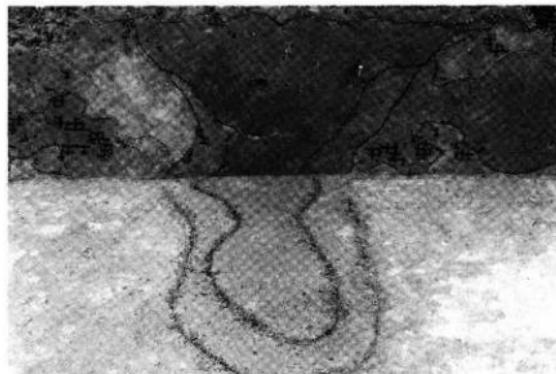
II

III



本調査区の西半壁（北東から）

II



下位層に陥入した二層暗褐色粘質土  
(SK-1五)

III

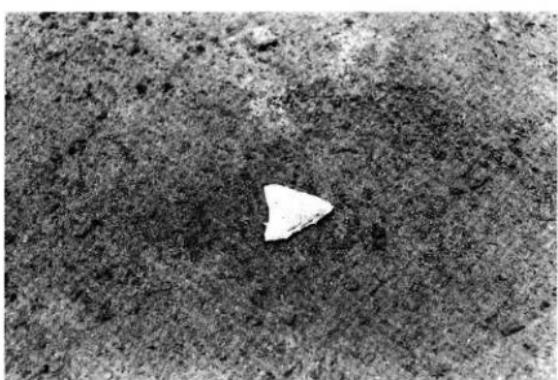


SK-1-1土坑より上位層にのせる横溢流  
(西半壁)

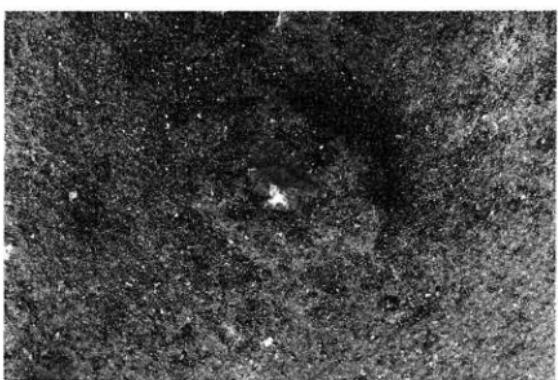
磨製石斧出土狀況（三層灰褐色粘質土）



石鏟出土狀況（三層灰褐色粘質土）

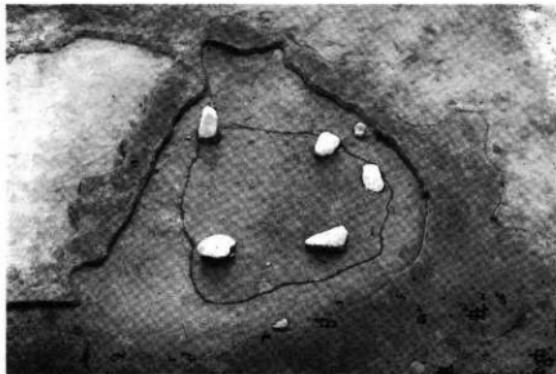


石器剝片出土狀況（七層暗褐色砂土）

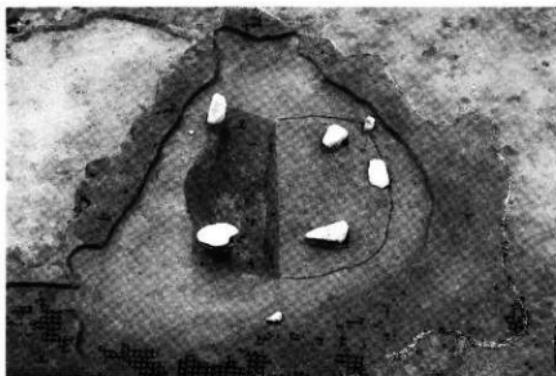


二

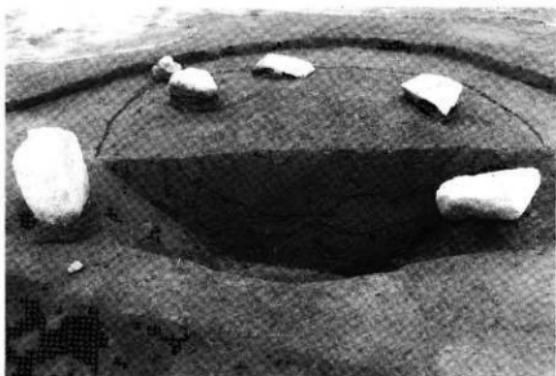
一



東からみた土坑上に表出した石  
(I) (K)

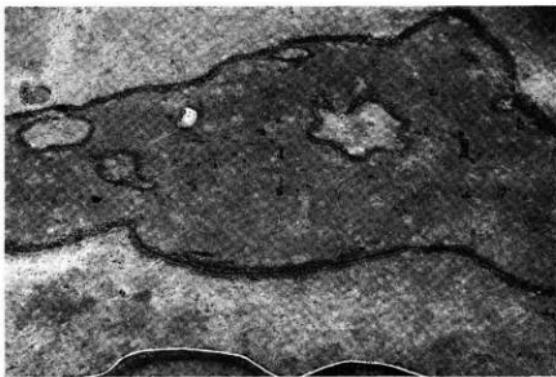


半裁方法による検出状況 (II) (K)

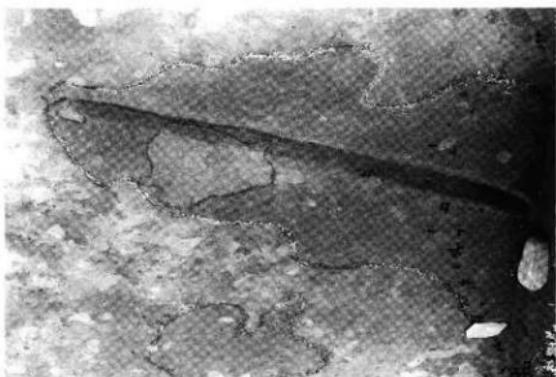


南からみた半裁状況 (III) (K)

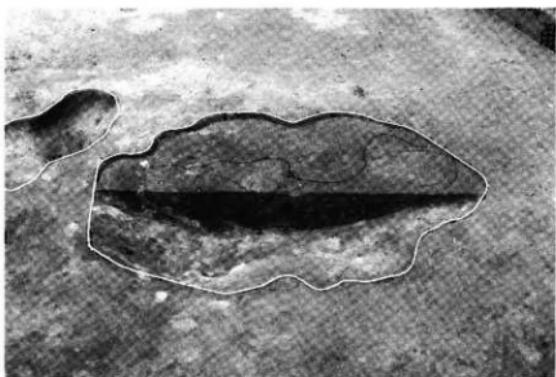
SKO九土坑表出状況（南から）



SKO四土坑表出状況（北から）



SKO一〇土坑の半截状況（南から）



一

二

三



SKO四十坑上の配石

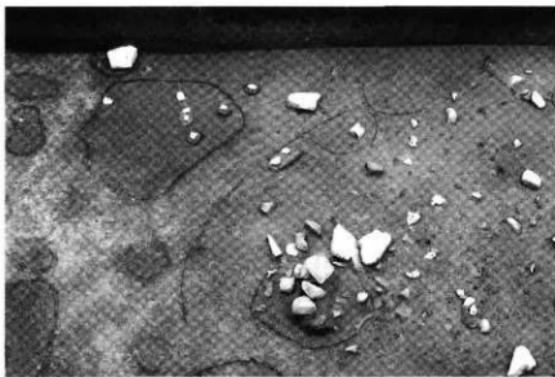


SKO一〇・SKO六・SKO八・SKO九・  
SKO十坑の検出および完掘状況  
(東から) (上)

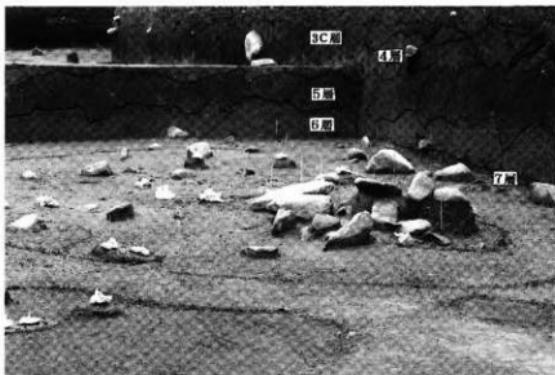


南東からみた三層造構の完掘状況  
(各遺構が円周しているように  
見えられる) (下)

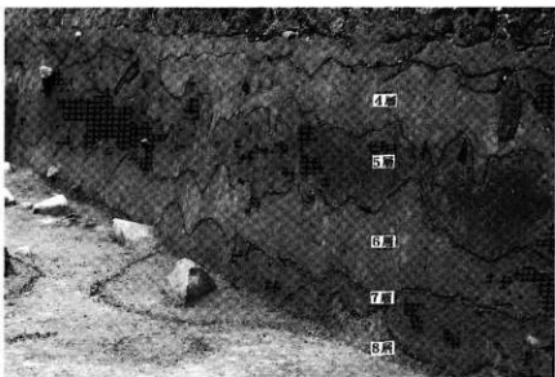
七層に表出したSⅩO-1(集石坑)や  
土坑などの遺構(東上から)



北東からみたSⅩO-1(集石坑)と  
遺物の散布状況



七層に至る堆積の層序状況(西半壁)



一

二

三



SK-10 (集石場) の焼石状況

二



SK-19 土坑の表出状況 (南から)

三

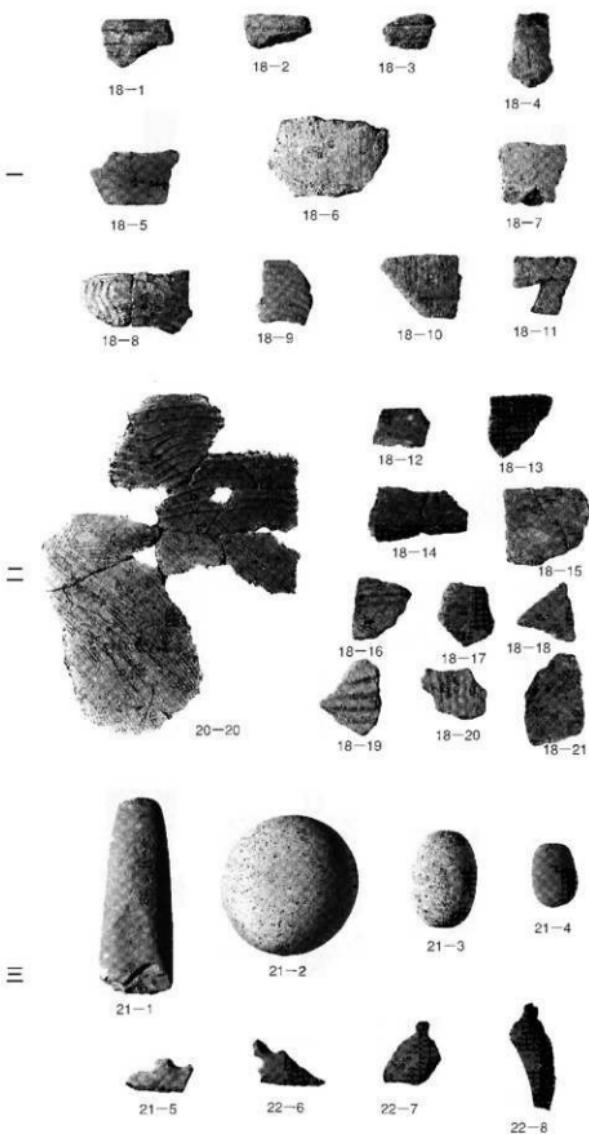


SK-19 土坑の検出状況 (東から)

第三十章の位・上層

第三十章の位・下層

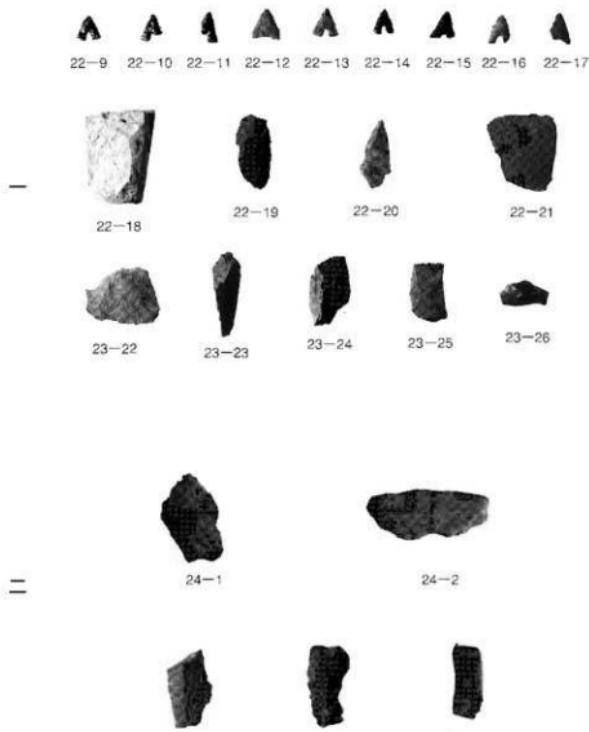
第三十章の位・下層(1)



上層・下層の石器 (I)

七段の石器 (II)

（南東から）



---

平成 9 年 3 月 19 日 印刷  
平成 9 年 3 月 26 日 発行

匹見町埋蔵文化財調査報告第21集

## 田 中 ノ 尻 遺 跡

発 行 匹見町教育委員会  
島根県美濃郡匹見町大字匹見1260

印 刷 有限会社 谷 口 印 刷  
島根県松江市西川津町3570

---